

# 薩摩の旅記念文集

## 薩摩の旅記念文集



米欧亜回覧の会







## 目次

	頁
最南端の地とその八百年の歴史 . . . . .	泉三郎 (1)
薩摩の旅によせて . . . . .	西脇美都絵 (2)
十四代目沈寿官の笑顔 . . . . .	星 守彦 (3)
沈寿官窯 . . . . .	浅生庸子 (4)
薩摩の旅 . . . . .	永島脩一郎 (6)
島津・薩摩の栄光と挫折 . . . . .	大森東亜 (7)
年表・幕末・維新 (薩摩藩) . . . . .	大森東亜 (9)
鹿児島旅行 思いつくまま . . . . .	金本君子 (10)
さつま旅行雑記 . . . . .	三岡弥生 (13)
その土地のものを食する . . . . .	田中直美 (15)
島津雨 . . . . .	西井正臣 (15)
鹿児島の旅ー感想 . . . . .	山田哲司 (17)
一言の感想を申し上げます . . . . .	橋本信子 (18)
歴史の解釈 . . . . .	新倉宏子 (19)
薩摩歴史紀行雑感 . . . . .	石川直義 (20)
濱崎太平次【特別寄稿】 . . . . .	西井易穂 (23)
浜田藩と会津屋八右衛門 . . . . .	三原 浩 (25)
一言ご挨拶申し上げます . . . . .	西田昌美 (26)
俳句 . . . . .	有馬増子 (26)
薩摩史の旅で考えたこと . . . . .	納家弘美 (27)
薩摩の旅ー西郷どんに思いを寄せて . . . . .	松本伸子 (29)
国内歴史ツアー・薩摩の旅 . . . . .	小野博正 (30)
知覧特攻平和会館を訪ねて【特別寄稿】 . . . . .	永富邦雄 (35)

[表紙・桜島カット絵は松本伸子さん]





## 最南端の地とその八百年の歴史

泉 三郎

薩摩が幕末維新の原動力になり得た背景は何か。

西郷、大久保をはじめあれだけの人材を生み出し得たのは何故か。

その秘密は、現地を旅し、各地でレクチュアを受けて、より明快にわかったような気がする。そのポイントは何かといえば、やはり薩摩の立地、その海に開かれた地勢と風土であり、その守護大名時代からの長い歴史であると思う。薩摩が日本列島の最南端に位置することは極めて大きな意味をもったし、琉球まで勢力圏にいれていたことは、そのまま中国や南アジアとのつながりをもつことであった。それは、徳川幕府の鎖国制下にあっても外に開かれた特別な地域であり、当然のように密貿易にも有利だったことをあらためて認識させてくれた。和寇といわれた海賊も、むしろ武装交易集団というべきものかも知れず、その少なからぬ集団が薩摩を拠点にしていたこともうなづける。その冒険的な精神や経済力は藩の財力や財政においても大きな意味をもったことは明らかだろう。

また、島津家が三十二代もつづく家柄であること、初代の忠久が頼朝の子だという説、それは半独立的気風の背景にその歴史があったことをも再認識させてくれた。その八百年に及ぶ守護・戦国・外様大名としての勢力は、徳川十五代と比べても隔絶している。「徳川、何するものぞ！」の気概がそこにあっても少しもおかしくはない。そして、重豪という蘭癖の豪傑大名、濱崎太平次という冒険的でスケールの大きな豪商、調所笑左右衛門というハラの据わった猛烈な大経済家などが存在したことに、薩摩の気宇壮大な気分がすでに表れていて納得がいく。

そして西郷や大久保ら多くの人材を輩出させた薩摩藩には、それを育て抜擢した名君斎彬公の存在が欠かせないが、それはまた薩摩の伝統の中に生まれ、英邁な祖父重豪の薫陶によるところが大であったに違いないのだ。そして五百万両の巨額借金をものともせず、洋学に投資し人材を育てた大きなソロバンが結局は薩摩を富強藩に仕立て、さらには日本を西洋の植民地化から救う大きな力になったとも解釈できるだろう。

それにしても、今回も前回の長州ツアーに続き、当会ならではの内容の濃いツアーになった。それは世話人の周到な準備のお陰であり、現地で沈寿官氏や尚古集成館の田村省三館長や坊津の橋口亘氏に親しく話を聞くことができたこともとても有り難かった。それから参加メンバーの多士済々ぶりであり、旅の間にお互いの交歓ができたことも大きな収穫だったと思う。そして、その生の様子がこの文集によって記録されることを、大変嬉しくまた有意義なことだと思う。

最後に、この旅が、企画・手配・連絡・現地案内と、幹事の小野博正さん、浅生庸子さん、山田哲司さんの尽力に負うところが大きかったことを思い、記して深く感謝の意を表したい。

## 薩摩の旅によせて

西脇美都絵

窯の庭 唐おがたまの ほの白き 臘たけし花 風に香りて

南洲の 墓前の白百合 大輪の 生きざま今も 郷に息づく

西南の戦に 斃れし 武士に 友の一族 名を連ね居り

島津雨 磯庭園の 旅人に『ようごわしたな』と しばしの豪雨

仙巖園 桜島をも 借景に 文化の華は 代々と 継ぎをり

いろは歌 語り継がれて 幾星霜 薩摩魂 育くむ礎

早朝の 見知らぬ街の 風を知り 歩みあゆみて 旅の快感

東支那海の 霞める沖は 波荒く 前途多難の 日中を思う

砂風呂に 身を横たえて ゆく雲を 解き放たれて 追いかける眼よ

一服の 知覧茶含み うるおえば 武家の屋敷に 江戸の匂いす

読みきれぬ 知覧の遺書の すすり泣き 吹き荒ぶ世の 嘆きに聞こゆ

飛び立ちて 往きしままなる 特攻機 生きるわれらは 何償わん



香木—唐おがたま (写真：大森氏)



知覧・特攻平和記念館前

## 十四代目沈壽官の笑顔

星 守彦

今回の薩摩旅行は、最初に訪ねた、苗代川の沈壽官工房での、十四代目沈壽官氏の何とも言えない 好い笑顔が最も印象に残った。

十四代目沈壽官氏のことは、司馬遼太郎の「故郷忘じがたく候」や 対談「薩摩焼と鉄とアジア」を読み、またテレビ「街道をゆく」でも見ていて、いつか訪れて、お会いできたらと思っていたが、今回それが実現できたことは何よりであった。

沈壽官家は、約四百年前 豊臣秀吉の慶長の役で朝鮮に出兵した日本軍が、秀吉の死により、和議を成立させ撤退した時、薩摩藩主・島津義弘が慶尚北道にいた約80名の陶工たちを連れ帰ったその子孫である。

「故郷忘じがたく候」によれば、実際は島津軍により拉致され、兵糧船に乗せられ、薩摩半島西岸の浜辺に漂着したようである。韓人達は 戻りに戻れず 泣く泣く棲みついたのであろう。当時の島津藩としては、関が原の戦いに対応しなければならず、拉致してきた捕虜たちは忘れられた存在になったようだが、徳川の世に落ち着くことになり、捕虜たちが島津藩に泣訴して、島津義弘が苗代川に土地と屋敷を与え、朝鮮筋目のものとして、武士同様に礼遇し、陶作活動をさせて、出来た陶器を徳川に献上するなど、薩摩藩の財政に寄与したのが本当のところらしい。

陶器作りに必要な土や上薬を探すために、島津義弘は地理に明るい家臣を韓人につけ、薩摩全土を搜索させた。李朝の特色ある白磁を作れる土は容易には見つからなかったようで、結局出来るだけ白磁に近づけるべく、皮を薄くして、それが独自の白薩摩といわれる薩摩焼を生み出したのである。

この白薩摩は徳川家や諸藩に献上し、高い評判を得て、薩摩藩としてはこれを産業としていくため、苗代川に藩立工場を設立した。薩摩焼の希少性を保つために白薩摩

を島津家御用以外は焼くことを禁じ、一般の需要には「黒もん」と称する黒薩摩を供することを許した。以来三百年、沈家では純化してその技法を伝えて、血脈を守り、薩摩の歴史に生きてきた。

幕末までに薩摩藩は、白磁工場の規模を大きくし、十二代沈壽官により、コーヒー茶碗や洋食器を作らせて、長崎経由で輸出して巨利を得て、結果として倒幕の財源の一部となった。また 12代沈壽官の白薩摩はパリ万国博に 薩摩藩として出品され、外国人の賞賛を博し、明治になってからのオーストリア万国博にも出品して更に評判を高めた。

明治8年藩立工場は廃止され、十二代沈壽官が私財を投じて工場を引きつぎ、独立自営により苗代川のみならず薩摩製陶業界を指導して、中興の祖となった。

その後十三代沈壽官が継いで、ろくろ一筋の道を歩いたが、若い時は 鹿児島の高を出て、京都帝大法学部で学んだという。そこで十四代目が旧制中学を出るとき、美術学校に行きたいと言ったら、「どうせ村に帰って、一生茶碗屋をやらねばならぬ者が、若いころだけでも茶碗と縁のないことをやって息を抜いておかねば、折角この世に生まれてきた我が身が可哀そうすぎる」といって、早稲田大学政経学部へ送り出してくれたという。

彼が鹿児島旧制二中に入学した時、(自分では本当に日本人で士族であることに誇りを持って苗代川の小学校で学んできたと思っていたが)、朝鮮人であるということを利用して、喧嘩を売られて袋叩きにあったが、卒業するまでにはすべて降したという。始めはもう学校をやめようとも思ったそうだが、十三代目は「喧嘩も勉強も一番になって、撥ね返すほかなカ。」と言って、朝鮮貴族の血が流れている家系について話をしたという。彼の笑顔の裏には こんなことも隠されていた。

展示品を案内された時、現在は十五代目

に家督を譲って、孫を相手に焼き物や将棋を教えているとの話をされて、どなたかが「お孫さんは幸せですな。」と水を向けると、「イヤー、(私は)手が早いですからなー。」と言われたのは、ほんとうに好い笑顔であった。



1 4代沈寿官を囲んで (写真：星氏)



## 沈壽官窯

浅生庸子

長年の夢がかなった薩摩旅行、山田さん、小野さん、又皆様のおかげでとても楽しく、美味しく、思い出に残る旅になりました。ありがとうございました。今回はどうしても行きたかった所の一つであった沈壽官窯について書いてみようと思います。

何年か前に、萩原延寿氏の「遠い崖」を読みました。が(全14巻)、その12巻に・・・明治10年1月アーネスト・サトウが、2年に及ぶ賜暇を終え、長崎に戻ってきた時、彼を待っていたのが上司パークスからの薩摩政情視察命令であったとあります。親友の

英医ウィリスにも会えるし、(あちこち歩き回って日本旅行書を書いているサトウとしては)又新しい見聞ができると期待して出発しました。ところがその先に待ち受けていたのが私学校生徒による「火薬庫襲撃」に始まる西南戦争勃発という驚愕の事実だったのです。その辺の事も非常に興味深い事なのですが、今回それはさて置いて・・・サトウは舟で阿久根に着き、出水、川内、市来、と鹿児島に向かって進んで行く途中、東市来で朝鮮人陶工の地を訪ね、非常に興味をそそられました。鹿児島に着き、一旦ウィリス宅に落ち着いたものの、肝心のウィリスが出張中で、西郷も鹿児島入りしておらず、未だははっきりした情勢がつかめないまま、一応今の所落

ち着いている状態(のようにサトウには見えた)で、又ウィリスの女中の一人が苗代川の出身だったこともあって、案内付きで朝鮮窯を再訪しました。そこで12代沈壽官に会い朝鮮陶工のそもそもの来歴から、作陶の行程、朝鮮風俗等、詳しく見聞してきます。それを基に西南戦争が終わった翌11年(確かサトウが会長をしていた)日本アジア協会で「薩摩の朝鮮人陶工」という題で講演をした…という話を読みました。

「遠い崖」を読んだ後、司馬遼太郎の「故郷忘じがたく候」を読み、又私の親友からご主人の関係で14代沈壽官氏に招かれ窯場を訪れた時のお話を伺い、ますます行ってみたい思いが募りました。

当日はお天気も良く、14代沈壽官さんは伺ったとおりの素晴らしいお人柄で、歴代の作品を拝見しながらお話を伺っていると、突然「これは、朝鮮語の教育書で(写真)、今ではこういう物は朝鮮にも残っておらず、現在世界に3つしか有りません。一つはここに、一つは京都大学に、もう一つはサンクト・ペテルブルグにあります。何故ペテルブルグかと申しますと、明治10年、アーネスト・サトウが鹿児島に来る途中に立ち寄って、一部を持ち帰り、それが彼の死後、ドイツ人の手に渡り、その人の死後ロシア人の手に渡ったのです。」という説明があり、思わぬところでアーネスト・サトウの名前を聞き、一瞬自分が当時の歴史の中にいるような気がして、嬉しくなりました。帰ってからもう一度「遠い崖」を読み返してみました。「アーこの本のことだ」というところが見つかり、又「カラー・日本の焼き物・2・薩摩」(1975年)に14代沈壽官によるサトウの講演の要約があるところを再読し、さっそく図書館から借りて読んでみました。

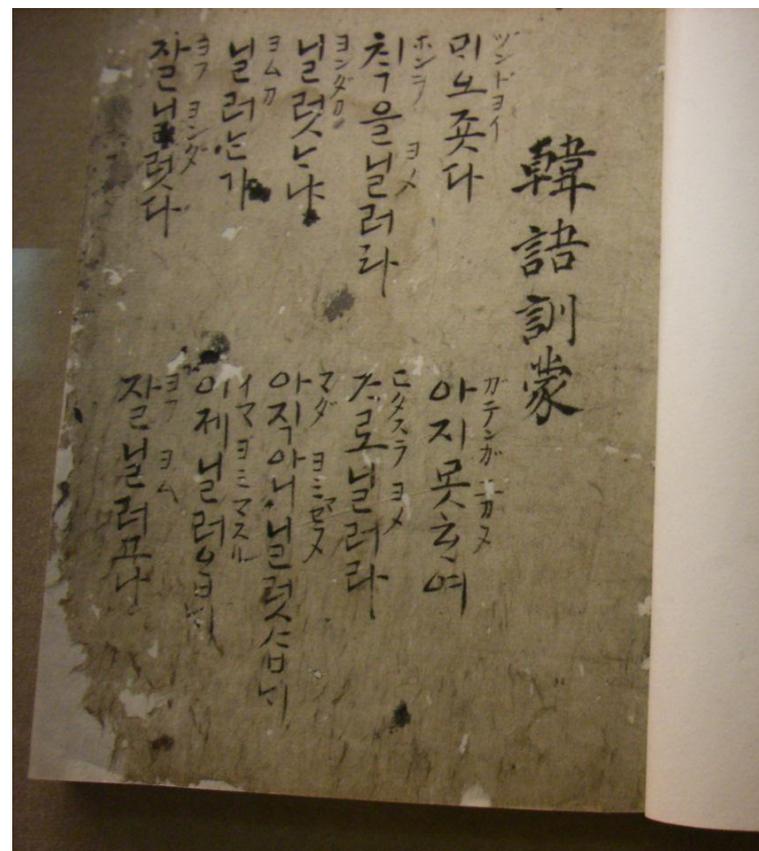
これは14代沈壽官氏が薩摩焼き全般について詳しく書いている本でした。その中に…歴史については簡潔な資料しかなく「当時を知る人も殆んど故人になり、これを聞くよすがも無くただ諦めていたところ、思わぬところから偶然の機会に面白い資料を入手する事が出来た。評論家の萩原延寿氏が

明治初期外交について調査研究のため、イギリスに行かれた際、イギリス人の書いた「薩摩における朝鮮陶工たち」という資料を発見、コピーして持ち帰られ恵贈して下さいました。」というくだりを見つけ、そういう事だったのかとびっくり致しました。つまりアーネスト・サトウが時空を越えて14代沈壽官氏に、12代氏の語った自分達の歴史を教えてくれたのです。14代氏はその本の中で「苗代川の工房、陶技は明治10年2月に来薩したアーネスト・サトウのレポートと殆んど変わっていない。…今私が蹴っているロクロも…登り窯もサトウの青い目にふれた当時の窯そのものである」と書いています。

なんだかとても楽しくなりました。

来年は佐賀という事で、今から何を读もうかと考えています。良い本があったら是非教えてください。

皆様又お付き合いくださいます。



# 薩摩の旅

永島脩一郎



今から約30年前、私は、家族共々、福岡県の春日原に住んでいた。夏休みの家族旅行で、南九州を旅したが、その時は、大隈半島の佐多岬で海水浴を楽しみ、フェリーで佐多から山川へ渡り、長崎鼻、池田湖などを巡り、指宿に宿泊した。アルバムには、くっきり見える桜島を背景に磯庭園で撮った写真が残っているが、鹿児島市内は、ただ通過しただけであった。

今回の旅は、それ以来のもので、それなりにセンチメンタル・ジャーニーの要素はあるものの、多くの歴史的事跡を具に見ることが出来、その点で全く異なるものであった。

さて、私事であるが、生まれつきのギョロ目玉ゆえに、色々な人々に似ていると言われ続けて来た。その中には、初対面の、亡き妻の高校時代の友人に、「西郷隆盛の風貌ですね」と言われたのが最近のものであり、同じようなことを幼い時から何度となく耳にしていた。

「西郷南洲顕彰館」で、イタリア人キヨソネが描いた肖像画と対面して、目、眉、耳、それに骨相的にも似ているかなあー、と思った次第である。勿論、人物のスケール比較は、論外であるが……。その夜の宴席でそのことを話した所、数人の方々から、「なるほど」と言われた。その席での自己紹介の折、学生時代の「かごうま」の友人に教えてもらった、私の知る唯一の「薩摩弁」、「おまんさあー、まこてえー、よかおごじょじゃすなあー」を披露したのだが、大きな拍手があり、それは、何と「尚古集成館」

の田村先生のものであった。後に、この「貴女はとてもきれいですね」という意味の薩摩弁の経緯をガイドさんに話した所、彼女は「口説くには、最高の言葉ですね」と微笑んでいた。

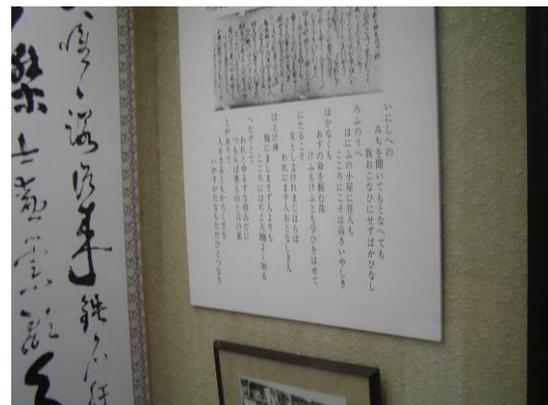
この旅に発つ2日程前、「現未来部会」が開催されたが、この時の討議の主題は、いわば教育であった。この度、薩摩の郷中（ごじゅう）教育を詳しく知る機会を得て、これは、大いに参考になると思った。二才頭（にせがしら）の統率下、先輩が後輩を指導する形の青少年教育が行なわれていたが、その三つの目標は、以下の通りと聞いた。

1. (自らに) 負けるな
2. 嘘をつくな
3. 弱い者をいじめるな

この教育が幼い時に徹底されているならば、現代日本で続出している、慨嘆すべき犯罪の数々は、起きないで済んだのではないかと思われる。日新公（じっしんこう）、島津忠良は、その教育観を「いろは歌」の形で残しているが、これは、郷中教育の基本書であったという。その中の一つ、「いにしへの道を聞きても唱へてもわが行いにせざばかいなし」という公の歌は、極めて印象深いものである。

技術立国日本の原点ともいえる事物を今に伝える集成館、密輸まで行なわれていた坊津の諸港などを訪れ、薩摩の地の地政学的立地を再考し、そこに住んだ、積極的に外部との接触を求めた人々に思いを馳せるなど、今回の旅は、私にとって正しく「温故知新」の旅であった。

以上



## 島津・薩摩の栄光と挫折

大森 東亜

今回で鹿児島行は3回目。1回目は仕事で一泊し、翌日空路、那覇へ。2回目は屋久島からの帰り、市内をバスで巡り、城山から造士館第七高校跡・黎明館を見学し、宮之城、川内に抜ける。今回初めての市内見学地として加治屋町西郷生誕地と維新ふるさと館、南州墓地、磯庭園があったが、市外の沈壽官工房、坊津、知覧の3ヵ所が個人的にも訪れてみたい場所であった。沈壽官工房では浅生さんのご手配により十四代目じきじきにご案内と説明をいただけるとは思ってもよらなかった。歴代の沈壽官の作品は昨年5月、京都伝統工芸館で沈家四百年の精華として初公開され、そのとき鑑賞した作品が本来の収蔵庫に収まり展示され、二度目の邂逅となった。坊津は、鑑真の上陸地として遥々現地を訪れる又とない機会に私には嬉しいことだった。おまけに歴史資料センター橋口亘氏からのお話の通り坊津・鶴島が国の文化審議会により、名勝区域に追加指定を受けたことが見学当日、地元紙南日本新聞の一面で報じられていた。ささやかだがタイムリーに実地見聞したことになる（写真参照）。

さて、今回の鹿児島行を機縁に俄かに西郷、大久保、島津関係の本を一瞥した。明治維新がなぜ成立したか、一口に薩長同盟がその帰趨の決め手となったとされてきたが、キーマンは誰であったのか、長州のフットワークの良さに目が惹かれがちであるが、江戸幕藩体制を倒した基は島津の力が大きかったように思われた。とりわけ島津斉彬の果たした役割が、西郷、大久保、さらに島津久光に引き継がれ、明治維新に寄与した。特に斉彬の死後、大久保らが中心となってつくられた「精忠組」突出計画を契機に、久光をして斉彬の遺志を尊重し、尊王のもと事変到来のときは、藩主が率兵上京することを藩是とすることにした。このような藩是をもとに藩をあげて幕末・維新の政局に華々しく関与し、西郷、大久保は藩是をバックにそれぞれ個性的な働きをなした。とりわけ西郷の豊かな人間性が軍事に辣腕を振るった実力者でありながら政治の舞台に彩りを添えた。このように私は維新成立までは島津の栄光のときと見る。斉彬が開明的な曾祖父重豪の寵愛と影響のもと薩摩の内政において広く海外に知識を求め、海外技術導入、殖産興業の涵養に努め、集成館事業に集約する。蘭学者、高野長英、緒方洪庵などに執筆、翻訳依頼を行なうほか、蘭学を奨励し、長崎遊学、大坂適塾入門などさせ、医術、ライフル銃

製作、蒸気船製造、軍艦建造、紡織事業などに従事させた。斉彬の死後、その遺志を引き継ぎ洋学養成機関「開成所」を創設する一方、幕末期に15名もの英国留学生を送り出している。さらに有力大名として、重豪は娘茂姫を十一代將軍家斉夫人として、婚姻関係から島津は徳川とつながりがあり、斉彬は將軍家慶急死後の將軍継嗣問題に関与する。その過程で浮上したのが島津家忠剛の娘篤姫を斉彬実子として近衛家経由で十四代將軍家茂への降嫁があり、このことにより斉彬は將軍の岳父となる。これは斉彬が老中阿部正弘と親しい関係にあったことのほか、重豪の引いた路線上の出来事であったともいえる。島津は外様とはいえ徳川家の中に深く入り込んでおり、公家の近衛家との縁家関係とも相まって斉彬には王政復古による島津の徳川に対する覇権奪取の気持もあったかと思われるが、当面は朝廷尊崇のもと徳川を立てつつ公武合体による政権運営により外国勢力に対峙していこうとしていたように思われる。王政復古と徳川に対するスタンス、さらに公武合体に対する考え方が長州と微妙に異なり「禁門の変」にも連動していると思われる。斉彬死後の展開は彼の想定外であったのではなからうか。

なお、島津の暗い陰の出来事として「高橋崩れ」がある。いわゆるお由羅騒動で切腹江戸家老を含め6名、遠島大久保父を含め17名、約50名もの藩士が処断された。これには藩の財政施策をめぐる問題のほか、まだ藩主就任前の斉彬であったが、斉彬の継嗣が問題とされ、父成興の側室お由羅の子、久光をお由羅が藩主に仕立てる策動あったとされる。事実関係は不明であるが、斉彬の実子関係者はことごとく病死などにより幼年死或は若年死しており、その背後にお由羅の策動が推定されている。そのお由羅をめぐる藩内に派閥がつけられ藩の政策ともからんで一大紛争となり、結果お由羅派が勝利した。こうした藩内の問題を抱えながら斉彬は、死の直前の病床にあって実子六男（2歳）がありながら後継藩主に久光の子、忠義を指名し、弟久光を後見役とした。いずれにしろ斉彬は久光に後事を託し、藩内を固めたのであった。

ところで維新後、薩摩島津はどうであったか。維新までの藩を挙げての島津の貢献にもかかわらず島津に対する報いが少ないこと、また西郷、大久保が久光をさしおいて政治上の実力者、上位者として

行動していることに加え、久光は新政府の政策を良しとせず、徳川を倒し、王政復古までを藩是としたが、それ以上の改革は特に望んでいなかったようである。息子の藩主忠義が死ぬまで鬻を落とさなかったことに象徴される。また西郷は王政復古までの数奇な活躍はさることながら維新时期、軍を掌握する者として廃藩置県、徴兵令など重要施策を処理し、きわめて重要な働きをなし、岩倉使節団不在中の留守政府を預かり、多大の貢献をした。しかし、いわゆる「征韓論」の議論の中で、西郷の遣韓使節が大久保・岩倉ラインによって天皇裁可により否認され、下野してから西南戦争での自死に至るまで、新政府に壮大な負の働きをなす。大久保は薩摩を離れ、明治政府の骨格を形成していくが、業半ばにして凶殺に倒れる。それは士族層の不満の捌け口とされたといわれているが、その要因は冷徹な大久保が国運を左右する征韓論、西南戦争における西郷に対して断固とした政治的決断をなしたことへの反撃のほか、佐賀の乱などで敗れた不満士族への共鳴、同郷の黒田清隆の親族殺人に対しては罪を問うことなく不問に付したことへの反発などもあったと思われる。西郷と久光はともに新政府に参画したが対応は異なった。久光は後ろ向きで、兄斉彬の遺志をついでやってきたことが何だったのかという思いに捉われていたと思われる。

西郷は遣韓使節問題を別として政権を下野するまでは前向きに対処した。しかし、鹿児島に退き、私学校設立協力はよしとするも西郷がつくったともいえる新政府への反逆となると、話は後ろ向きである。過激な守旧派、桐野利明、篠原国幹などに囲まれていたとはいえ英明な西郷に私学校が若者の訓練場所からクーデタの基地化するのが分らなかったとは考えられない。西南戦争への参画も、西郷自身の行くところ新政府に不満の士族が各地で自発的に参加してくるものと見込んでいたとしか考えられない、事実、全国から多少は馳せ参じてはいるが、圧倒的奔流にはならなかった。政府軍の乾坤一滴の対処もあった。

大久保に代表される有司専制への糾弾はあるものの大義名分なき旗色不明の西南戦争の挙兵であった。西南戦争は維新の革命に対する島津・薩摩の壮絶な挫折だったと思う。

なお、司馬遼太郎は、小説「翔ぶが如く」で次のようにいう。

武士階級の消滅は士族にとって大変なこと。とくに鹿児島県士族にとってこれほどばかばかしいこ

とはない。一部は近衛兵や警視庁に入ったがあとは失業、失業武士を収容できる近代産業も政府は興していず、島津も立つ瀬がなかった。幕末の政治運動や戊辰戦争の戦費も島津の自費でやった。維新成立後、政府のしたことは領地の召し上げ、四民平等という封建的島津家の否定、それらの新政が「天皇」という名のもとに出ている。そして、岩倉使節団不在中、留守政府の残った西郷が旧勢力没落と憤慨の悲鳴や怒声を一身に受けざるをえなかった。さらに「日本は産業もなにもない。武士のみがある。武士という無私な奉公者を廃止してなにがのこるのか、外国に誇るべき精神性がなにもない」これを思った一瞬間、すでにこの大革命家は反革命家に転じていた。それは西郷の知ったことではない。この西郷の巨大な矛盾を一挙に解決するのが、「征韓論」だったとする。

小説上の話であるが、西郷が反革命を分らなかった筈はなかったと思うし、問題の解決を「征韓論」に結びつけるのも短絡的だと思われる。司馬の調子のよい文章で読者に影響を与えるところ大であり、国民に誤解を振りまいていないか危惧する。司馬が下野後の西郷に同情的なのは問題だと思う。日本人一般の心情として忠臣蔵人気があり、滅び行く者への愛惜があるにしろ西郷が率いたがゆえを以て肯定してはならないと思う。

西南戦争はその後の日清戦争、日露戦争、日中戦争、日米戦争へと続く戦争の道への下地をつくっていったように思えてならない。日本の近現代史は戦争と侵略の歴史である。戦争において人々の生存と生活を守るための戦いがあったか、国や軍の權益を確保するためにいずれも人々の生活を困苦にさらし、他国の領土を侵し他国の人々に苦難を強いた戦争であった。明治維新という革命が人々を海外に開放し、殖産興業により富を蓄え、教育水準を高め、人口を増やし、人々に平和と繁栄を享受させたのであれば結構なことと思う。

しかし、その平和と繁栄が他国を含めた人々の犠牲の上に成り立っていたとすればいかがなものかと思う。私には明治維新の革命がもたらした正負の遺産をきちんと未だ清算しえていないように思われる。EU諸国で共通の歴史教科書が作成されたという。アジアにおいていつ、どのような歴史の共通教科書が書かれるのであろうか。終わりに、知覧の特攻平和会館の展示と南州墓地が重なり、鹿児島のが無益な戦いに潰えた人々の鎮魂の場であることを改めて思い知らされた旅であった

【参考】 幕末・維新年表（島津斉彬、島津久光、西郷隆盛、大久保利通関係、人物欄 数字は数え年）  
作成：大森氏

西 暦	和 暦	斉 彬	久 光	西 郷	大 久 保	主 な 出 来 事
1809	文化 6	1				斉彬、江戸で誕生、父斉興藩主に
1812	文化 4	4				斉彬・世子として幕府に届けられる
1817	文化 14	9	1			久光、斉興側室、由羅の子
1827	文政 10	19	11	1		
1830	天保 元	22	14	4	1	アヘン戦争
1844	弘化 元	36	28	18	15	西郷・郡方書役助、フランス船那覇来航
1846	弘化 3	38	30	20	17	大久保・記録所書役助、藩鑄製方設置
1849	嘉永 2	41	33	23	20	高橋崩れ（お由羅騒動）、大久保・免職謹慎
1851	嘉永 4	43	35	25	22	斉彬・藩主、集成館事業開始
1853	嘉永 6	45	37	27	24	ペリー浦賀来航、将軍家慶急死、第十三代将軍家定、大久保・復職、蔵役
1854	安政 元	46	38	28	25	日米和親条約下田・箱館開港、西郷・庭方役、江戸詰
1855	安政 2	47	39	29	26	江戸大地震、藤田東湖庄死、長崎海軍伝習所開設
1856	安政 3	48	40	30	27	島津家息女将軍家定夫人、斉彬・将軍岳父
1857	安政 4	49	41	31	28	大久保・徒士目
1858	安政 5	50	42	32	29	安政大獄、第十四代将軍家茂、斉彬急死、忠義藩主（久光・後見）、西郷自殺未遂、奄美大島潜居（月照死）
1859	安政 6	—	43	33	30	大久保・「精忠組」突出計画を久光に、斉彬の遺志藩是に
1860	万延 元		44	34	31	桜田門外の変、咸臨丸米へ、大久保・久光と初会見
1861	文久 元		45	35	32	和宮将軍家茂に降嫁東上、大久保・御小納戸
1862	文久 2		46	36	33	寺田屋事件、生麦事件、久光入京、東上 西郷・入坂後、沖永良部島へ
1863	文久 3		47	37	34	薩英戦争、八・一八政変、七卿長州へ
1864	元治 元		48	38	35	西郷復職軍賦役、禁門の変、第一次長州征伐、 4ヶ国艦隊長州攻撃
1865	慶応 元		49	39	36	藩英国留学生派遣、集成館機械工場竣工
1866	慶応 2		50	40	37	薩長同盟成立、第二次征長、将軍家茂没、第十五代将軍 慶喜、孝明天皇没、
1867	慶応 3		51	41	38	大政奉還、倒幕の密勅、王政復古、竜馬暗殺 西郷・東征大総督府参謀、大久保・新政府参与

西 暦	和 暦	斉 彬	久 光	西 郷	大 久 保	主 な 出 来 事
1868	明治 元		52	42	39	鳥羽伏見戦争、江戸城開城、明治維新、五箇条の誓文
1869	明治 2		53	43	40	東京遷都、戊辰戦争、五稜郭戦争、 西郷・藩大参事、大久保・新政府参議
1870	明治 3		54	44	41	西郷・鹿児島で勅使岩倉と会見、横山正太郎自殺
1871	明治 4		55	45	42	廃藩置県、西郷・木戸と参議、久光東京に、 大久保・大蔵卿、岩倉米欧派遣団副使
1872	明治 5		56	46	43	太陽暦採用、学制頒布、新橋・横浜間鉄道開通 西郷・陸軍大将兼参議
1873	明治 6		57	47	44	岩倉使節団帰国、西郷・征韓論敗れ鹿児島へ下野、 徴兵令、地租改正令、ウィーン万博出品、大久保・参議
1874	明治 7		58	48	45	民選議院設立建白、佐賀の乱、征台決定、久光・左大臣 大久保・北京で清国と和議交渉、西郷・私学校設立
1875	明治 8		59	49	46	大久保・地租改正事務局総裁
1876	明治 9		60	50	47	廃刀令、神風連の乱、秋月の乱、萩の乱
1877	明治 10		61	51	48	西南戦争、西郷自刃、第一回内国博覧会
1879	明治 11		62	—	49	大久保暗殺
1880	明治 12		63		—	
1887	明治 20		71			
1888	明治 21		—			



開聞岳（写真：大森氏）



坊津：双剣島と鶴の島（写真：大森氏）

## 鹿児島旅行 思いつくまま

金本君子

鹿児島旅行に参加するについて、次の3つの事が、頭のなかを行き来した。

その1 西南戦争は必然的なものであったのか。鹿児島の人は、それをどのように受け止めているのか。

その2 1754年(宝暦4年)には幕府より命じられた木曾三川の治水工事。薩摩より美濃まで300里、総奉行平田鞆負ほか974名が旅立ち、工事は成功するが割腹自殺者52名、病死者33名、総経費40万両を費やし、平田鞆負は責をとって自刃した。しかし、この話は明治になるまで秘された。このことを地元鹿児島では、どのように受け止められているのか。

その3 著名の日本史学者、網野善彦氏によれば、BC3世紀ごろよりアムール川上流付近から、ほぼ1千万人の弥生式文化を持った人々が九州北部に流入し、そこから西へ進み中国地方、四国の北半分近畿地方をへて岐阜のホッサマグマまで入って止まった。北海道、東北、関東より、ホッサマグマの線までと九州南部、沖縄には縄文式文化が残った。それで日本の北と南に同じ縄文式文化が残された。今でも鹿児島の人や地名にその名残がみられるとあった。何か一つでも、それが発見できるであろうか。

鹿児島空港に着いて、直ぐバスに乗り伊集院に向かって走り出した。誠によく話すガイドさんで2泊3日、必然的に彼女流の鹿児島を吸収することになった。

その1であるが、鹿児島市に入って、西郷と共に殉じた人々のお墓に行った。その数の多さに驚いた。武士はかくあるべし、かように育てるといふ話ばかりが目立った。しかし、近代の史観によれば、各藩、特に外様大名は、幕府の目を盗み武士を減らしていく少人数で精鋭主義をとっていた。毛利氏はすでに外様大名と決まった時点から巧みに武士を生きにくくして自然に減らしていったといわれる。そして商人に代表される人々は、想像以上に動き回り情報は日本中にあふれていた。バスのガイドさんから鹿児島弁を聞いて驚いた。全く分からなかった。昔から幕府の隠密の侵入を防ぐためと聞いていたが、この違いは、江戸時代の人の流れと情報の不足を考えると、強い言葉で言えば時代錯誤ではないだろうかと思ってしまった。初日の夜の尚古館の館長さんのお話は武士の教育など述べられた後に、唐突に武士？のリストラの時代といわれたが発展性はなかった。

なぜ鹿児島、島津藩は武士が多かったのかも一つの理由に、他藩に比べて並外れた経済力があつたのだろう。これについては、その2でふれるとして、もう一つは地理的条件であろう。城山から見た桜島、英国船は目の前の、手の届くようなところま

で来たのである。最南端の藩であり、東西北の三方は海で外国に接していたのである。密輸もできたが、備えも必要であったのだろうか。これは、あくまでも私の私見である。



しかし、私たちは館長さんのお話も聴き、また、遺産の宝庫、鹿児島・磯地区を見た。島津斉彬は様々な分野にわたる集成館事業を起こした。これは薩摩藩だけではなく、日本全体を生まれ変わらせるための取り組みとあるが、武士ばかり目立つ藩士たちの行く末まで視野に入れていたのではないか。そして卓越した人材と武力によって幕府を倒し維新を成し遂げた。しかし世の中は薩摩藩士にしてみれば自国の人々によってなされたはずの、この急激な変化について行けなかったのだろう。それに日本一の軍需工場もあだとなった。あちこちに残る西南戦争の弾痕はあまりにも痛々しかった。

鹿児島へ来て、当地の人々はどの様に捉えているのか、と興味があったが、説明をしてくださる方々は、いかにすばらしい国、進んだ文化、産業、学問そして維新の偉人の話をし、ガイドさんは同じ口調で、淡々と西郷隆盛と西南戦争の古戦場を説明し案内した。その原因は全く触れられなかった。私はあのたくさんのお墓を思い出すたびに、何かちぐはぐな感じをすてきれない。英知を持った人々も止めきれなかった戦争、育てられた人々も真面目な人々だったのだ。たくさんものを見ながら時代の変化に無事についていくことの難しさを感じた鹿児島旅行だった。

その2 2002年6月、私の属する大学の歴史サークルは鹿児島藩の宝暦治水と木曾三川を1泊2日につぶさに見た。信じられないものだった。長良川、木曾川、揖斐川の三川を一度に見たとき、その川幅と水量に足のすくむ思いだった。明らかに幕府の薩摩藩つぶしであった。厳しい工事に加え、そこに残る幕府役人のいやがらせ、薩摩藩士へのひどい待遇、それに言葉の違いが地元の人々に土田舎の芋侍の印象を与えるなど、今で言うすごいストレスの中での日々であった。しかし、工事は彼らの英知と努力によって短期間に終了したが、費用は40万両、これによって薩摩藩は大変な苦境に陥った。平田鞞負は責を取って自刃した。のどかな濃尾平野にある終焉の地に立って、何故なぜと繰り返すばかりだった。そして、この借金は藩内の農民を含む全藩の人々に多大の苦しみを与えたが、わずか20年で返してしまった。

この話を鹿児島の人々がどの様に受け止めているか興味があった。どのようにしてこの借金を返したか、私たちの間では単純に「密輸でしょう。」だった。しかし、鹿児島では何故か、この「密輸」という言葉は「禁句」であった。坊津も最も栄えたのは鎖国までと強調され、また黎明館でいろいろ聞いた案内の方も鎖国までは貿易が主たるものであったが、それ以降は、ここはお米が取れないので国内向けの特産品を考え収入を得たといわれた。砂糖きび、硫黄、漆、鉄などの金属といわれた。岐阜の資料では泡盛、薩摩緋、陶器などあり、砂糖きびから砂糖を製造し、ひそかに韓国、中国に輸出したとある。

能弁なるガイドさんが初日から何度も何度も平田鞞負を連発した。いかに今でも大事な人なのかがよく分かった。その1に関係するが、この工事の命令が島津藩に入ったとき、大勢は幕府と戦うとのことだったようで平田鞞負は必死でそれを防いだといわれている。戦う力があつたと思えるべきなのだろう。辛酸をなめた藩士のことまで伝えられているのか、また幕末にたくさん偉人を生む原動力に、あるいは、それが一因になったのか。当地で聞いてみたかったがガイドさんの話のみで少し寂しかった。

その3、鹿児島でアイヌのような顔をした人、西郷隆盛のような人に会えるかと思っていたが残念ながら一人もいなかった。お仲間の永島さんが一番似ていた。しかし3日目のこと、ガイドさんが何気なくチネン？は「アイヌ語のチネリから来たものといわれますが、どうしてこんなところにアイヌ語が関連するのか分かりません。」と言った。たったひとつでも私には大きな収穫だった。縄文での、鹿児島とアイヌの関係が連想されて。

考えていなかったことで新しい課題の一つはシラス台地であった。空港から伊集院までその地形は落ち着かないものだった。デコボコ、デコボコどこで作物ができるのかと思った。ガイドさんは盛んに数年前の水害の話をした。黎明館で説明を受けた。鹿児島県の60%のシラス台地は大変なもの。上で降った雨は70メートル下へ滲みていく。下では常に水は流れている。上で生活するには水を70メートル下から揚げなければならなかった。写真はスカートをはいた女の子たちが水を運んでいた。山の下は山が直角になるとそれ以上崩れないと言われた。米はできないから16世紀までは貿易、その後は前述の産業でこの地は生きていったと言われた。

次に大変驚いたのが、この地を襲った廃仏毀釈のすさまじさだった。西南戦争の影響かと思ったが、これはもっと早く、辞典で見ると明治1年とあった。しかし、この地のすごさは特別に思えたが、聞いたのも初めてだった。諸国の街道を歩いていても、根こそぎ寺がなくなっているところは知らない。お寺と神社が混合、または、隣同士は多く見るが、こんなところは知らない。前述の説明の方は、「本当に悲しいことで、未だに影響を受けています。お寺さんが一宗派以外きてくれませんか。お寺がない寂しさは体験しないと分かりません。」と言われた。常識として、また童話の中にも、毎日

の話の中にも仏様やお地蔵様や坊さんがいない社会は考えられないし、日々の人の生死を扱う寺が、急になくなるショックは計り知れない。自分のところから出た人々によって作られた政府の、この行動を鹿児島の庶民はどう感じたのか。西南戦争かと少し思ってしまった。鹿児島がなぜかくも廃仏毀釈が徹底したのかの記述は辞典には説明されていなかった。調べてみたい課題である。

最後に知覧の特攻隊の発進地の見学であるが、当時、わが家では、上の兄は学徒動員で出たあと行方不明、下の兄は陸士か海兵に行きたいと毎日父を悩ませていた。私は女の子、末っ子で3月9日の空襲の後、一人で疎開した。その後、東京空襲のあと何日も両親の消息もつかめない日々もあった。そんなことで何か生々しく、なにかガイドさんの案内の観光地めいた話にかみ合わず、早々に出てきてしまったが、東京に帰って、娘と話した時に、娘が特攻隊を全く知らず、驚いて観光地でよいから残してほしいと思った。思いかけず、語り継がなければならないことがなされていないことに反省したが、本当に話すか、いつ話すか、まだ気持ちは定まらない。

鹿児島旅行、桜島には今回そっぽをむかれてしまったが、騒動以上に知らないことがたくさんあり、有意義な旅行だった。薩摩藩と言うより、大げさに言えば、南の強大な独立国という感じをもたされた2泊3日であった。これから先、この地はどの様に生きていくのか考えさせられもした。

完

## さつま旅行雑記

三岡弥生



今回の歴史ツアーは参加者の大半が女性ということもあって、大変和やかな雰囲気の中に終始した。心配されたお天気もまづまづで、快適な旅行であった。又、幹事の方々のご尽力で、お支払いした旅行代金に比してグレードの高いホテルに宿泊できたことも旅の快適度を更に高めたのは間違いない。

さて、初めて九州に足を踏み入れた私にとって、鹿児島空港に降り立った時の印象は「ここは‘日本’だ。」ということだった。数ヶ月前、冬の女満別空港に降り立ったときは「内地とはずいぶん違う」と感じたものだった。もし神話が事実を伝えているとしたら、こちら辺りこそ‘日本’の原点そのものなのだろう。

出発前、家人と「薩摩の名物は何かしら？」といいつつ挙がってきたものは、さつま汁、さつま揚げ、サツマイモ、くらいであったが、旅行中これらが次々と食膳に登場してきたのには驚いた。

さて、最初の見学地は沈寿官先生の陶器工房であったが、先生は独特の風格のある方で、お話も非常に面白かった。先生は私の韓国の知人に容貌、物腰等が非常によく似ていらしたので、お尋ねしたところ、代々、秀吉時代に韓国から連れてこられた村民の間で結婚してきたが、血が濃くなりすぎたので、ご自身も、息子さんも東京の人（韓国系？）と結婚されたそうだが、故国の風をできるだけ保とうとされてきたのであろう。薩摩藩時代、薩摩陶器が西洋に多く輸出されていたとのことだが、以前、英国人の知人が‘SATSUMA’といていたが、西洋諸国では良く知られていたのに違いない。改めて、デザインが華やかで、西欧風なものも納得できた。

その後、鹿児島市内へ向かい、大久保利通、西郷隆盛、島津家、等々の関連の史跡を訪ねた。旅行前、多分薩摩弁からくる印象だと思うが、薩摩に対して何か野蛮な、遅れているような印象を持っていたが、実際には高度に洗練された文化を持った藩だということがわかった。日本の最南端に位置していた薩摩は海外文化に最も近い先進地域だったのだ。集成館の工場も今では中小企業の工場という印象しか与えないが、当時は現在の東芝、松下等の大工場にも匹敵する規模に感じられたに違いない。

夜は二晩共、米欧壺回覧の会らしく、地元の講師による講演が開催された。二晩とも講演は非常に面白かった。特に今まで私にとって曖昧だった倭寇の実態が明らかになり興味深く傾聴した。——ポルトガル人が種子島に漂着し、鉄砲を日本に伝えたというのが定説

であったが、最新の説では、初期は海賊だった倭寇が14～15世紀には、性格を変え、武装した商人となり、現代でいえば、総合商社のような役割を果たしていたとのこと。ポルトガル人は鉄砲を再生産できる能力をもった土地を倭寇の情報網を利用して探し、意図的にそういう条件を備えた種子島に上陸し鉄砲を伝えたというのである。一丁の鉄砲を持ってきても何のインパクトをあたえないが、それを大量に生産できれば、大名等に売って莫大な利益が見込める。種子島は当時砂鉄を産出する最先端工業地帯だったのだ。——現在宇宙ロケット基地が種子島におかれているのも頷ける気がした。歴史もこうなってくると面白い。何か実質的な利益がないとなかなか人は動かない。

鹿児島は海洋国家。種子島は目と鼻の先だし、琉球も近い。東京から考えるのと地理的感覚がまるで違う。東シナ海を横切れれば中国が横たわる。考えただけでもワクワクする。

薩摩半島をほぼ半周し、最後に知覧の特攻隊の記念地を訪れた。年輩の参加者の中には、特攻隊が身内におられる方がいらっしやり、悲痛な気持ちに襲われた。ただ、戦後60年経った今、涙していても始まらないと思い、予防策としては先ず国民が選挙のときに頑張らなければ、と考えてきたとき、ふと思い当たった。当時、選挙といっても、女性には選挙権がなかったのではないかと。特攻隊の方々にはお気の毒だけれど、彼らの尊い犠牲のうえに、我々の今日の平和な生活が築かれている幸せを噛み締めなければいけないと思った。

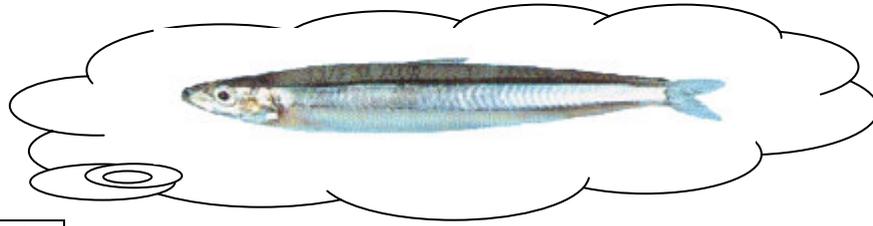
以上いろいろ見聞を重ねたが、現代に生きる私に生生しく迫ってきたのは、錦江湾に浮かぶ二隻の不気味（に見えた）な自衛艦の影、喜入町の巨大石油備蓄タンク群、初めて見た‘火の国’の地熱発電所、台風銀座の枕崎の風力発電所、だった。（私は電気ヤの娘で小学校高学年の3年間を福島県の磐梯山の麓の猪苗代湖の水を利用した発電所の近くで暮らしたので、発電所を見ると親しみを感じてしまうのであるが。）というのも、鹿児島では伝統的な工業は見かけても、近代的な工業を見かけなかったように思う。北九州には自動車産業など工業地帯が出現していると伝え聞かすが……。今後、鹿児島はどういう道を進もうとしているのだろうか？気になった。九州新幹線が全線開通すると事情は違ってくるのかもしれないが。

今回の歴史ツアーは私にとって、入会後二回目のツアーなので、大分面識のある方が増えて、いろいろなお話を伺うことができて楽しかった。

例えば、ご家族を東京に残され、あえて京都で一人住まいをして、源氏物語を研究されている男性からは、京都のお寺が催すさまざまな講演会の様子とか、世界に名だたる米系飲料メーカーのボトラーで品質管理を担当されているエンジニアからは、品質管理に関する様々なご苦心——飲料の味を保つための缶の内側に施すコーティングの苦労（コストを考慮しなければならぬので）とか、いま日本では米系企業の本来の飲料より緑茶やコーヒーのほうが売れるとか、興味深いお話を伺った。女性では、オリエント学を研究されている奥様や、海外駐在員の奥様からは海外生活にまつわるお話とかを伺い、視野が広がる気がした。短い旅行で全員にお話することはできなかったが、素晴らしい方々がいらっしやるので、今後も機会を捕らえていろいろな方から興味深いお話を伺えたらと思う。

楽しい旅行を有難うございました。これから台風シーズンが始まる。台風が来るたび、枕崎の様子がテレビ画面を賑わすことになるだろう。さつま旅行は生涯忘れられない旅になりそうだ。 完

その土地のものを食する



田中直美

旅行のポイントの一つに、「その土地のものを食する」というのがあります。今回の薩摩の旅では、「吉備女子・黍魚子」の刺身が印象的で、毎回の食事にお目見えでした。何とか食べてみたいと思いましたが、山育ちの私は、海の幸、特にぎらぎらする青魚は大の苦手なので惨敗でした。鹿児島南部では「帯」のことを「キビ」といい、小魚の体側中央部の青白色の帯を「帯」とみて「帯の小魚」と呼ぶらしいです。食べられなかった事がまた、忘れられない良い思い出になりました。

## 島津雨

西井正臣



私が参加するツアーでは雨に降られないと豪語してきたのに、今回の鹿児島旅行では2日目の仙巖園の庭園散策の肝心なときにザンザン雨の洗礼を受けた。悔しかったが、良い思い出になりました。

『島津雨 テルテル坊主 ずぶ濡れに』

ガイドをして下さった今井さんが、我々を黒門の下に避難させながら、自分は雨に打たれても健気な笑顔で、「鹿児島では、こんな俄か雨はよくあります。島津雨と申します」と慰めてくれた。帰ってから広辞苑や百科事典で調べたが、「島津雨」など出てこない。あれは観光客用のガイドの常套句に違いない、と思いながら念のためグーグルで検索した。ありましたピンポン！ 薩摩では激しい俄か雨を、良いことの前兆だとして、島津雨と言うそうです。島津家初代誕生にまつわる古くからの言い習わしと説明してあります。激しい俄か雨もひと時だけで、無事に磯浜の庭園を巡ることが出来たのは幸いでした。

豪壮というよりは、趣味の良い貴族的な庭園でした。雨で櫻島が見られなかったのは残念でしたが、錦江湾を隔てた桜島を借景にしたあたりは鎌倉以来の守護大名らしいと感心。明治4年の廃藩令をうけて、最後の藩父・久光侯がここで花火を眺めていた姿を思い浮かべながら、こぶりになった雨の中を歩きました。

公武合体論者で、徳川將軍家や近衛家とも深い姻戚関係にあった久光にとって、西郷や大久保が薩摩の財と兵力を用いて倒幕の中核となり、700年の島津家の領主としての立場を無くしてしまったのは、心外の至りであったに違いない。しかし、黒船襲来の危機を迎えて、徳川幕藩体制のままではいけないことは、斉彬のような蘭癖は無く保守的であった久光にも良く分かっていたに違いない。どうにもならない時代の終わりを、花火で受け入れるしかなかったのであろう。そのとき櫻島が見えていたかどうか。西郷達が主君には断らずに、自分達の信念に従って倒幕維新の道に突進し、そのために薩摩の武力を借りたことは、昭和の革新将校にとって都合の良い先例となったのではないか。島津家は領主としての権力はうしなしたが、歴代当主は今でも尊敬され、その歴史を守る姿勢が行く先々で感じられました。西南の皇室と言うべきか。

尚古集成館長の田村先生の薩摩海洋国家論は実に面白かった。その翌日に黎明館のエントランスで、沖縄へ続く鹿児島県の模型の上を歩いたが、薩摩藩が1200キロメートルにおよぶ日本の西南に広がる島々をかかえる海洋国であったことのイメージがはっきりした。北を上にした馴染みの位置で日本列島を見ると大阪から東京が中心になるが、90度回転して西を上にして見れば、薩摩がシナと繋がりヨーロッパの窓口であったことが、よく分かる。西南の雄藩であった薩摩が、鎖国体制の日本のなかでヨーロッパの産業革命と軍事力の発達に敏感であったのは、その地理的位置からして当然のことであるが、集成館事業を見ると、その先見性と規模と実行力に驚く。それにつけても、現代文明は閉塞しそこかしこで分裂が進む国内外の状況を見ながら、我々は日本のあり方を命がけで模索しているだろうか。占領後の体制の中でぬくぬくと眠っているような気がしてならない。

明治の元勳たちはこんな我々をどう思っているのだろうかと考えながらバスに戻りました。城山を下ったところでガイドさんが向田邦子さんが住んでいた場所ですと案内してくれたのが、妙に印象にのこっていたので、帰ってから調べてみると、本人が「鹿児島は私の作家人生の原点である。東京育ちの私には故郷もどきの地である」と書いている。小学校5年と6年を城山の下山下小学校に通い、校門を出ると天文館通りであったそうだ。「父の詫び状」には、その頃の向田さんの家族風景がそこかしこに描かれている。旅から帰って、旅行本来の目的とは全く関係のない本を読んで、その土地のことを振り返ってみるのも、また一興。と言いながら、司馬遼太郎の「明治という国家」を読み直してみると、今回の薩摩旅行を経験して見る目が違ってきたように感じました。

島津雨には降られたが、天気もまずまずであった。櫻島も少しは拝めた。開聞岳は次回のお楽しみとなったが、予報では3日も台風の余波で良くなかったし、我々のいない間の東京は悪天だったことを思えば、あの俄か雨は旅が良くなるお告げであったのかも知れない。20人を超す平均年齢60歳以上のグループが、あの強行軍の日程をこなし楽しく学べたのは、小野幹事・山田案内役の計画とご配慮と名古屋組を加えた女性パワーに依るところ大であるにしても、やはり島津雨のお陰と言うべきでしょう。

久しぶりの鹿児島は、曇時々雨、ときに豪雨、なんともお天気には恵まれない旅となった。それでも、滴るような緑の中の沈寿官工房の佇まい、仙巖園での島津雨の歓迎、頂上は雲に隠れてはいたが、その全容を十分に窺うことの出来た桜島、開聞岳など、印象に残る情景も多く、心に残る楽しい思い出となった。35年前、1年半を過ごした土地であり、土地勘、方向感覚は大丈夫と思っていたにもかかわらず、何度も場所、方向を確認することばかりで、しかも見学したところは、ほとんどが既訪の場所であったので、何か物足りない、落ち着かない気分の3日間でもあった。しかし、今回改めて勉強した事柄も多く、旅の中身は、2夜続きの夕食後講演会での内容豊かな講話も加わって、充実したものであった。

南北1200キロの長大な領地をもつ「海の国」薩摩の歴史は島津家の歴史に重なり、坊津の対明貿易、指宿、山川港を中心とした幕末までにいたる琉球との進貢貿易など、その実態を見聞し、改めて薩摩藩の巨視的な国際認識と海外文化・文明と取り組む進取の気質、藩の財政事情と強かな貿易政策などを知ることが出来た。明治期に、陸の長州、海の薩摩と言われたことの背景には、単に海軍の人材だけでなく、長い「海の国」薩摩の歴史があったことを理解できたように思う。



この旅での大きな収穫のひとつは、浜崎太平次についてであった。これまで知ることが少なく、今回、多少の知見を得たことは近代史への理解を少し進めることになっ

たといえよう。維新の大業はもちろん多くの人材の活躍に負うものであるが、われわれが山川港でみた銅像の太平次（第8代）は、維新動乱期における薩摩藩の活動の財政基盤を担ったにもかかわらず、その事跡は歴史の中に埋もれていた感があり、もっと深い研究の対象となってしかるべきことと思われる。太平次（浜崎家、屋号はやま木）については、各種の人名辞典、百科事典に当たってみたが、わずかに鹿児島、堺の両紡績工場買収にかかわったこと（明治11年、14年）が記されているのみであった（国史大辞典、吉川弘文館、第3、6巻）。また、各種の鹿児島県の歴史書にも豪商太平次の名前はあるものの、8代日本人の事跡についてはほとんど記述がない。わずかに「鹿児島百年」（上）幕末編（南日本新聞社編、昭和43年刊）が数ページをさいて、藩主・島津斉彬と太平次について、当時の時代背景、その親交の様子を記述している。これによれば、太平次の生年は1813年、没年は1863年。死の直前、ときの孝明天皇が侍医を差遣わしたとの話が残っている。知遇を受けた斉彬（1858年急死）の生前の誼であろうと言われている。斉彬はしばしば太平次の指宿の本宅を訪問し、あるときは、銅製の木に、純金の梅花をつけた豪華な置物を土産として贈ったとのことで、このことから、その反対給付がどのように巨額なものかは想像できよう。斉彬はまた、太平次の赤ん坊を抱いて親愛の情を示すこともあったという。幕府が「やま木」の密貿易の証拠つかんだときも、斉彬は、太平次の次弟・弥兵衛をたてて沖縄に流島し、太平次本人は助けたと言われている。太平次の交易の範囲は、藩庁の保護の下、南は琉球、清国から北は函館に及んでいたといわれ、その富は当時日本一と称されていた。8世太平次の死後も浜崎家は薩摩藩の財政危機のたび献金し、慶応元年（1865年）の19名（17名とも）の海外留学生派遣は浜崎家の資金援助によるといわれている（西井氏小論文参照）。当会でも近代史研究を進め、このような歴史の一隅に、新たな光を当てることが出来れば幸いである。

了

一言の感想を申し上げます

橋本信子

ある意味では 旅行のつど その非日常性を 今回も又  
開聞岳が霧に覆われた時に 「懐かしさ」に出合った時の様に  
時も場も 周辺の人々も解らない。  
その様な ある何もない時なのですが  
経験としては繰り返される時に逢ったように思います。

開聞岳を消した粒子は視覚から頭の中の触覚へ そして全体に  
これも常のこと その為のみにみても 私にとって  
もはや旅行からの喜びをいただいたような満たされた透水で  
ございました。

その開聞岳にピラミッド・テキスト (エジプトのウナス王の  
ピラミッド内部に刻まれた一種の呪術分) が重なりまして  
スペイン語の造語要素の～s i s m oが一時に習合致しました。  
一例えば f a m o s o s i m oの訳は大層有名なのだそうです  
s i s m o (地震) ですので 地震波のごとくに  
遠くから流れ伝わるとも訳せるかとも思いますーそこで

天国にては 治まりかねて  
天降る 冥界までも天となす～s i s m o

又 アッシリアでもバビロンでなくてもあるのですが  
見たこともなく行ったこともない場のその柱に  
水の湧きあふれ出る壺を運ぶ女神像を思いますと  
島津雨とその晴れ間に結ばれまして



足速に飛び去る時の片蓋柱 すでに今日も 無 晴れ渡る

只今 読んでおります『古メソポタミアの歴史』『中世神話』『能』  
の詞章などのことが 鹿児島<sup>かたがひはら</sup>の幾つかの島、天候。そこで  
見学させていただいた数々と重なりまして、一言では説明しにくい事象を、  
思い切って、一言の感想といたしました。

皆様の御活命をお祈り申し上げます

## 「歴史の解釈」

新倉宏子

城山を登ってみると、錦江湾に浮ぶ桜島は頂上を曇空に隠したままドンと真近にいた。明治維新の志士を多く輩出した薩摩藩城下町は狭いところだった。薩摩藩が徳川幕府に敵対して倒幕したというよりも、‘世界の近代化の波を日本に上陸させた役回りを演じた’のだと理解する旅だった。(指宿の砂湯もよかったです♪)

私の知識では、関が原の戦いで島津藩(薩摩)は戦わずして戦場を走り抜けた外様、その後は200年以上も続く鎖国の扉を外国から叩かれるようになって、突然英明な島津斉彬藩主と周辺がクローズアップされるということだけだった。

島津藩は、今で言う会社の経営者精神で領民を育て、生活を守る気風が強い。薩長同盟の長州藩の方は部下に任せて自由にやってみよのタイプなので、いずれの藩も幕末の動乱期の中で‘自分で考えて行動する力’を育て持っていた人々が生活していたのだと思う。鹿児島県の北部は、九州南部の山(神話の高千穂や霧島温泉)に囲まれた地域で、南部は種子島・屋久島・奄美大島と点々と沖縄まで続く幾つもの島を浮べる海の部分が多い。ホテルのテレビでは、種子島以下〇〇島の様子が九州本土地域と同じ扱いで、天気予報もニュースも報じられる。

旅行スケジュールが進むに従い、薩摩の歴史がだんだんわかってきた。鎖国下で

も琉球経由で密貿易が盛んに行われ、長崎の出島なにするもので九州南部地域はアジア外交に門戸がひらかれていたと言える。もともと奈良時代には鑑真が辿り着き、倭寇の活躍のころには坊津が外国にまで名を轟かせ、そのルートで鉄砲もキリスト教も上陸してきた。

バスコ・ダ・ガマ以前にイスラムの子で明に仕えた鄭和が大艦隊を率いて喜望峰を廻っているらしいと最近騒がれているけれど、教科書で認識されている歴史は時の政府の道具に過ぎない。その土地に立って見ると、一般に言われている歴史とは違うのではないかと感じることもある。知覧特攻平和記念館では、戦争をするのは誰だろうと皆でもっと考えたいと思ったり、人々がそれに振りまわされなければならない現実の悲しさがこみあげてきた。戦争は必要悪だなどと言う人はのんき過ぎる。これだけ文明が発達したからには戦争は不合理であると、またまた意を強くした。

西郷さんの西南戦争は、勝海舟が「ぬれぎぬをほさんともせず子供らのなすがまにまに果てし君かな」と慨嘆するように、このやるせなさは説明できない。立派に整然と埋葬された南洲墓地に、若い命を投げ出した意味の大きさをもっと知ってあげなければいけないと思った。完



## 薩摩歴史紀行雑感

石川直義

はじめに

長州の次は薩摩と希望した一人として幹事をしていただいた山田哲司・小野博正・浅生庸子の皆様に感謝します。旅行中に私が考えていたことを断片的に記録しておきます。

鹿児島：明治六年の政変後の大久保利通と西郷隆盛の心事に興味がある。今回訪問したいくつかの歴史資料館では新しい発見はなかった。明治六年10月22日に西郷は江藤・副島・板垣が岩倉邸を訪ね、翌日の岩倉の上奏内容を聞いて、遣韓特使の提案が却下されることが分かって西郷は23日早朝に辞表を提出した。天皇の裁可があつて江藤・副島・板垣・後藤四参議が辞表を提出した。（資料館では五参議いっせいに辞表提出となっていたのは不正確）西郷はその日のうちに邸を引き払って都内で身を隠した。行動を共にする薩摩武士の激増を抑えようとした。それでも百余名に達した。27日に大久保を訪ね離京の挨拶に来たとき二人は最後の喧嘩をした。伊藤博文が目撃している。西郷は『おいは帰る。後のことはよか頼む』と言ったのに対し、大久保は『おいは知らん』と素気無く言った。それを聞いて西郷は『知らんとはなんつうこっか』と行って、そのままプイと出て行ってしまった。二人がこれほど激しい物言いをしたのは初めて見たと語っている。これ以降彼らは二度と会っていない。その後の西郷は佐賀の乱で江藤と共に立つかと疑われたが、まったくその意思はなく江藤から直接懇請あつたが峻拒した。明治十年一月私学校生徒による弾薬庫襲撃事件が起こったとき、「薩摩の連中が蜂起しても西郷は決して立っていない」と大久保は断言していた。西郷へ向けて勅使を立てかきこきあたりの篤い思し召しのほどを話して聞かせれば挙兵を止めるだろうと確信していた。西郷が参加しているとの正確な情報を得ると大久保は自ら鹿児島に赴き西郷と話し合ってくると言い出したが、伊藤博文が、『両雄の意見が対立したまま、刺し違えて死ぬ

ようなことがあれば、国家の柱石である両人を同時に失うことになる』と懸命に止めた。代わりに行った川村純義海軍大輔も西郷には会えず、『到底帰順というわけにはいかない。西郷は死ぬつもりでいるからこの際躊躇せず天誅の軍を出さねばならぬ』との電報を受けてようやく鎮圧を決断した。

私の見方であるが、西郷は江戸幕府を倒し明治政府を実現して自分の天命を果たしたと考えていたように思う。出来上がった政府には満足しておらず、第二に維新が必要とも考えたが、廃藩置県を強行して全国の藩主と武士の収入の道を絶ち、政変後も自分を慕う士族40万の挫折感を考えると西郷は自分が死ぬことだけを考えていたのではないか。遣韓特使も死をもって国家に貢献しようと考えていた。それが分かっていたから大久保も絶対行かしてはいけないとして潰した。西郷は薩摩の広い山野を犬一匹連れて猟をするだけで毎日を過ごした。明治政府の現状を嘆いてもこと大久保については一切批判をしていない。桐野たち側近に反政府運動をあおることもしていない。私学校の爆薬庫攻撃のときも、『しまった』ともらしたが、それ以降流れを止めようとしていない。むしろ自分の身をその流れに乗せたままであった。その後の熊本城攻撃から田原坂の戦いそして最後の城山での戦いに至る過程で彼は桐野たち側近の作戦にまかせきり、彼の戦略は一切出していない。洞穴を出て岩崎谷本道を下ったところで腹と腿に弾丸を受けて、『晋介どん、もうこの辺でよか』と言ったので、別府晋介は『先生、御免』といて隆盛の首を落とした。武士道最後の体現者西郷は甘んじて死んでいった。こうして西南戦争は終わりこれを機にして士族による反乱はわが国から消えた。大久保を中心にした明治政府の近代国家建設は軌道に漸く乗るのである。西郷は自分の死をもって大久保の夢実現に貢献したのではなかろうか。二人は最後まで友情で結ばれていたように思う。

日置町の14代沈寿官氏に初めてお会いした。沈家は慶尚北道青松出身で700年の歴

史を持つ陶工の家系であったが、16世紀末の秀吉の朝鮮侵略の折、日本に拉致された初代沈当吉の子孫である。同じ頃日本人で参戦して逆に朝鮮軍に投降したいわゆる降倭で友鹿洞に永住した沙也可（金忠善）の14代金善徳を知っていたので私は沈氏に関心を持っていた。二人は大阪で1990年代に会ったと聞いていたので本人に確かめたら沈氏は認めた。沈氏は温厚で謙虚な人柄で仕事は息子の15代に任せて隠居生活をエンジョイされているように見かけた。先祖の方々は異国で大変苦勞され山に登っては祖国を懐かしんでおられた姿を司馬遼太郎は作品にしている。金氏の方は子孫が七千人を超えて大勢力になっているがその一門の和に今でも苦勞されている。

山川：指宿に隣接する小さな港で、“やまがわ”と濁って発音する。薩摩藩の密貿易の港である。西井易穂さんの資料で濱崎太平次が密貿易で薩摩藩の天保の改革を支えた事情を実感できた。指宿の海岸にあった太平次公園の像で寄付者の中に川崎造船の名があったが、太平次の下で長崎支店で働いていた川崎正蔵が兵庫に創った造船所であり、現在の川崎汽船グループの発祥の企業である。太平次は1863年に死ぬが、65年に薩摩藩の17名の留学生派遣は浜崎家の資金援助で可能だったと西井さんは紹介している。この中から駐米公使森有礼、外務大臣寺島宗則、貿易商五代友厚を生んだことを思うと濱崎太平次の明治維新への隠れた貢献者であることも知った。

坊津：「ぼうのつ」と“の”を入れて発音する。私の関心はなぜ薩摩で廃仏毀釈が盛んだったのかという点だった。浅生さんの質問に答えて坊津歴史資料センター輝津館の研究員の説明によると、第一に明治維新のリーダー、第二に寺院の持つ資産に魅力、第三に仏教徒の中の対立を挙げていた。廃仏毀釈は明治初期の神仏分離令、神道国教化政策を全国各地で行われた仏教排斥運動であったが、なぜ薩摩は激しかったのだろうか。明治維新のリーダーであった長州では寺院は存続させたので第一の理由は強くないように思う。第二の理由は薩摩藩屈指の寺院として一乗院があったが、その史跡からの発掘で明時代の陶磁器が多数出土

しており、海上交通の全盛期には繁栄していたと思われる。その資産を取り潰して藩財政を補おうとしたことは大いにあり得たと思った。第三の理由は初めて聞いたが、一乗院が真言宗であるが、民衆は一向宗が多く弾圧され「隠れ一向宗徒」になっていたと言う。だから一乗院がつぶされる時彼らはむしろ歓迎したと言う。これもありうる話だと思った。

知覧：特攻隊の出撃基地で有名であるが、私は独断で海岸に近い場所と思っていた。しかし実際行ってみると茶畑が広がる山中にあった。道路の両側に数多くの石塔が配置されている。その数は1、036で特攻隊員として国のために犠牲になった若者の数と聞き、その数の多さに心が痛んだ。資料館で全員の写真と遺書が展示されていたが、私は大学の剣道部の先輩で米国に在住していたのに愛国心から帰国して商大に入り学徒動員で特攻隊に入った人を探したがその名はなかった。後で分かったが、知覧は陸軍の施設で、その先輩は海軍だから大隈半島の鹿屋基地だった。（故松藤大治海軍中尉について後述）

屋外の石碑に『アリランの歌声遠く母の国に思い残して散りし花々』とあった。11人の韓国出身の日本軍兵士が含まれていたが、その一人の歌であろう。永富邦雄さんの説明によると彼らは出撃前夜故人の鳥濱トメさんの富屋食堂で最後の晩餐を持ったが、そのトメさんの歌、『散るために咲いてくれたか桜花散るほどももの見事なりけり』を紹介されている。



日本映画『ほたる』は私が感動した映画で、韓国出身の特攻隊員のふるさとを恋人が訪ねると一匹のほたるがうれいように飛び

回る映像は忘れられない。

さて来年はどこに行きましようか。佐賀と言う意見を聞きましたが、あえて私の希望を言わせていただければ、官軍側の会津藩、米沢藩をご検討いただきたい。

松藤大治（オージと読む）先輩につき補足します。1921年カリフォルニア州サクラメント市に生まれ、米国籍を持つ。15歳のとき、日本での勉学を熱望し、母の実家福岡県糸島の祖母に世話になり、前原中学に学んだ。剣道をよくして中学対抗戦で活躍した。祖母が亡くなるまで2年間母と弟力と三人の楽しい団欒を味わったが、祖母が亡くなったので母と弟は米国に帰国した。勉強もよく出来て中4で一橋に入学した。両親は日本人移民でイチゴやホップを栽培していたが、学費と生活費を喜んで出した。昭和18年12月に学徒動員で出征したが、従姉妹浦梅子によると、『資源がないので日本は負ける』とか『俺は後輩の若い人たちのために死ぬんだ』といていたと言う。そして出陣のとき『身を羽毛の軽きに比し、生命を投げ打って祖国のために頑張ってます。男子の本懐これに過るものはありません』と立派な挨拶をした。1945年4月1日米軍が沖縄に上陸した。4月4日元山からさわやかな笑顔で出撃した。『敵艦に必中突入中』の電信を最後に壮烈な散華を遂げた。5月に大治の特攻戦死をカンサス州の抑留地で知った。父親は、『乃木大將は二人のお子さんを亡くされているのに、内は一人だから』とポツンと言った。母親は、『男として当然の務め。大治は立派なことをした』 日本政府は二階級特進金鷲勲章と勲五等授けた。



## 《特別寄稿》 濱崎太平次(1814文化11年—1863文久3年)

人・健康・医の研究所 西井易穂

第8代濱崎太平次は別名正房のことで、まさしく薩摩藩の光と影を背負った男です。彼なくして明治維新は成り立たなかったと思われれます。

濱崎太平次の資料は少なく、目に触れることも稀有で、その存在を知る人がほとんどいません。ここに太平次の紹介をしておくことは大変、意味のあることと思います。

これらの資料は私が現地を数回調査旅行し、鹿児島市・市立図書館で文献調査したものを基にして、佐多一夫著「濱崎太平次物語」を参考にいたしました。この書籍は指宿の砂むし会館・砂家、物産店にて購入可能で、一般書店にはなく、太平次の銅像も指宿の海岸太平次公園で楽しむことができます。

濱崎氏は大隈国分八幡宮の神職でありましたが、承応年間(1652~55)指宿郷十二町湊に移り、海運業を営み、寛政年間、第五代太左衛門の頃全国長者番付け「三ヶ津分限帳・大福町」には東の大関の三井に対し、西の大関が湊屋(濱崎屋号、半)・濱崎太左衛門でした。全家は伊勢の三井、大阪の平野屋、鴻池と肩を並べる隆盛を極めていました。7代目太平次ごろ、薩摩藩お由良騒動の影響を受けて逼塞し、八代目太平次生誕の頃は海商として瀕死の状態にありました。太平次は14歳のとき、家計を助けるため、水夫の見習いとなり、薩摩藩の藩船に乗り組み、琉球産物に着目し、海産物の買い入れの交渉をして、購入のための保証金をつみました。その年には大阪の間屋から借りられるだけの金を借りて、サトウキビなど特産物の買い付けを行い、莫大な儲けを手にして周囲の人々を驚かせました。その後30数年努力を重ね、造船所、海運、貿易に拡張して当時のわが国の最大企業に成長しました。太平次の出発点、母港は山川港です。ちなみにわが国トップ企業の一つである川崎グループの創設者は豪商濱崎太平次の長崎支店員であった川崎正蔵が兵庫で川崎造船所を創業しました。山川港を訪ねると、マンモス企業川崎重工業、川崎汽船の面影を今でも見ることができます。

八代目太平次の信条は「家が貧乏でもあったが、海が好きじゃ、船も好きじゃ、海には垣根がない。薩摩藩も幕府も長州もない。土農工商の身分の区別の社会制度がなく、実力の世界だ。また船の中の生活は運命共同体の生活だ。特に時化には船頭も水主も一体になって立ち向かわなければならない。そうしなければ生きられない無我夢中の世界だと思う。自分が生まれてから、初めて命をかけて打ち込んで行く仕事だ。」というものでした。この考え方は高田屋嘉平衛(11769~1827)の生き方、考え方とまったく同じ路線にあるものです。

このような少年を見出して登用したのが、調所笑左衛門でした。調所笑左衛門は重豪の命を受け、薩摩藩の天保の改革を成し遂げた人物です。当時500万両あった借財を返し、500万両の蓄財を成し遂げた人物です。大阪商人に250年賦返済という離れ業を強行し、密貿易を黙認というより、加担してその快挙を成し遂げた経済官僚です。

太平次は彼の庇護のもと、逼塞していた代々の海商「半屋」を建て直し、毎年30万両に及ぶ資金を薩摩藩にもたらしました。当時、波綻寸前にあった薩摩藩を調所が立て直し得た裏には濱崎太平次の役割が大きな意味をもっていました。ほかに指宿

田良の黒岩藤兵衛、柏原の田辺泰蔵、波見の重平兵衛などが活躍いたしました。太平次のそれは郡を抜きんでいました。全盛期の持ち船は巨船34隻、その中にはご法度の33反帆を超える稲荷丸、松保丸など大型快速船の秘密兵器も含まれていました。取引先は中国、ジャワ、キューバ、フランスに及びました。フランスには”サツマイシヨ“と名前をつけて砂糖の蜜輸出を行った記録があります。密貿易の港は久志港、坊津です。調所はこれらの海商に藩の海外貿易を加担させ、その見返りに秘密貿易を黙認したと言われていました。ところが、密貿易として幕府に露見した重大な事件が occurred。1863年(天保6年)に薩摩船が長岡藩領新潟で唐物の密貿易をしていたことが江戸で発覚し、重大抜け荷事件へと発展しました。「天保十亥年三月七日村松浜難船井唐物一軒御裁許諸写」に天保6年(1835年)11月に薩摩船が長岡藩領新潟で唐物の密貿易をしていたことが記載されています。当初、その船籍の所属は確定できませんでしたが、その後、太平次が所有していた船であると推測されるにいたりました。わが国密貿易のナンバー1とされている銭屋五兵衛(1773~1852)が藩の庇護なく活動していたのに対して、太平次の場合は薩摩藩との共同作業として密貿易を行えたところが、大きく異なっていました。琉球を支配する薩摩藩はもともと鎖国時代に特例として薬種の輸入を許可されていて、自然発生的に密貿易が行われるにいたりました。その取扱品は許可されている薬品に始まり、ビロード、ジュウタン、各種の織物、糸類を買い入れ、生糸、ショウノウ、シイタケ、ふかひれ、干ナマコ、ウニ。寒天、貝類、茶、陶器などを蜜輸出していました。今の密輸品にはこのほか、醤油、米、絹、骨粉、銅などが記録に残っています。

海を恐れず、水平線のかなたにある夢と希望に燃えた少年が巨視的な国際関係を肌身に感じ、時代遅れの幕府による鎖国政策の欠陥を本能的に感じ取って、蜜輸入を積極的に行ったことは銭屋五兵衛と同じ思いであったと考えます。

1848年(嘉永元年)調所笑左衛門が海産物の蜜貿易の責任を取って自刃し、1863年(文久3)太平次が死に、薩摩藩の庇護を失うにつれて、濱崎家は衰退の道をたどるのですが、慶応元年(1865)の画期的な17人の留学生派遣の壮挙は濱崎家の資金援助があったからできたのです。後年の寺島宗則、五代友厚、森有礼などが名前を連ねています。鹿児島中央駅前では彼らの群像を偲ぶことができます。

齊彬が豊富な資金を活用して諸外国の文化を取り入れ、幕末に薩摩藩主導のもと、明治維新が成立するには笑左衛門、濱崎太平次がいたから可能であったことを忘れてはならないと思います。

了

謝辞

本小論文作成に当たって、現地へのご案内ならびに資料収集に多大なご支援をいただきました鹿児島大学歯学部放射線学の故野井倉武憲教授、鹿児島大学医学部第1生化学教授、福重智子博士に深謝申し上げます。

## 浜田藩と会津屋八右衛門(1798-1836)

三原 浩

2006年5月、米欧亜回覧の会の薩摩歴史旅行に参加した際、会員の西井易穂さんから、薩摩藩の光と影を背負った男、浜崎太平次(1814-1863)について調査された資料を頂き、指宿の海岸に立つ太平次の銅像を見ってきました。私の故郷、島根県の浜田でも、ほぼ同時代に海の男、会津屋八右衛門が活躍していましたので、紹介させていただきます。

浜田港は、奥羽地方の米を大坂や江戸に運ぶ北前船の寄港地として、萩や下関と共に日本海航路で賑わった港で、八右衛門の家は、当時浜田に21軒あった回船問屋の一つでした。父親の清助は、通常500~1000石の回船の代わりに、幕府の規制を上回る2500石という巨大な船を建造し、大坂の商人を驚かせ、「石見の阿呆丸」と呼ばれたそうです。しかし、この船は1819年秋、江戸へ向かう途中、平底船の弱みから紀州沖で難破して消息を絶ってしまいました。清助は漂流中にオランダ船に助けられ、ジャワ、スマトラ、ルソンなどを経て3年後、長崎港に着いた時、役人の目を逃れて海に飛び込み、浜田に帰ってきました。漂流の話になると、「北風が暖かく、南風が冷たい所だった」などと言うので、人からは気が変になったと思われましたが、八右衛門は父親の首尾一貫した話を信じていました。

当時の浜田藩は6万石の小藩ながら、13代松平康任が1807~1835年の28年間藩主を勤め、幕府の老中職にありました。出世欲に取り付かれ、巨額の藩費を持ち出し、賄賂としてばらまき、寺社奉行、大坂城代、京都所司代と昇進し、ついには老中首座という最高の権力の座に登りつめます。浜田藩の家老、岡田頼母と年寄、松井図書は二十年以上もの間、江戸の藩主のための金策に追われ、藩の財政は危殆に瀕していました。

清助の死後、八右衛門は浜田藩御用の会津屋再興を願って、岡田頼母の配下の勘定方、橋本三兵衛と接触し、先ず竹島(今の韓国・

鬱陵島。日韓間で現在問題になっている竹島は当時は松島と呼ばれていた別の島です)との密貿易を始めます。そのため、1830年、幕府の目をごまかし、外洋航海に耐える、禁止されていた4枚帆で1200石の竜骨船を建造し、清助の名にちなんで「会清丸」と命名しました。竹島との密貿易は、国禁を犯す危険の割には成果はささやかで、やがて当然の成り行きで、台湾、ルソン、安南、ジャワまで足を伸ばします。運上金の額も増え、数年間にわたり藩の財政に大きく寄与しました。

しかし、1836年、幕府の隠密、間宮林蔵が薩摩藩へ向かう途中、浜田の茶店で珍しい木を見付け、密貿易発覚の始まりになります。早くから覚悟をしていた八右衛門と橋本三兵衛は、妻子を離縁していましたが、6月大坂町奉行の配下に逮捕され、江戸で取り調べの後、12月小塚原で死刑になりました。家老の岡田頼母と年寄の松井図書は、幕府の出頭命令を受けて自刃しました。藩主の松平康任は、その前、3月に出石藩のお家騒動に連座し、奥州棚倉へ国替えになっており、さらにこの密貿易事件によって永蟄居の処分を受けています。

会津屋のあった浜田・松原湾の岩場の突端にある鰯山には、死刑判決から百年後の昭和10年、巨大な自然石の「会津屋八右衛門氏頌徳碑」が建てられ、鎖国時代の禁制を犯して藩の窮状を救った英雄として、浜田市民は今でも八右衛門を誇りとしています。同じく死刑になった橋本三兵衛の碑は、浜田の東隣、出身地の江津・敬川町に建てられ、島根県出身の元首相・若槻礼次郎が「烈士橋本三兵衛之碑」の題字を書いています。橋本三兵衛の役割は、薩摩藩において浜崎太平次を登用し、藩の財政を立て直した後、密貿易の責任を取って自刃した調所笑左衛門の役割と相通じるものがあります。いずれも鎖国と言う時代遅れの政策の下で、主君のために自分の命を犠牲にした人々です。

江戸後期には、鎖国政策もほころびを見せ、ほかにも、加賀藩の銭屋五兵衛(1773-1852 獄死)、淡路の回船業者で、松前航路を開き、のち幕府の御用船頭となった高田屋嘉兵衛(1769-1827)など、歴史に名を残す海の

男がいますが、その影には、闇から闇に葬られた幾多の犠牲者がいたと思われます。それゆえにこそ、危機感に駆られた幕府は竹島事件を公表し、判決の直後、鎖国を更に徹底する高札を全国に発したのです。しかし、その四ヵ月後にはモリソン号事件が発生し、1853年のペリー来航へと激動の歴史に繋がります。

蛇足ですが、竹島事件で永蟄居となった松平康任のあと、浜田藩主には、三方所替により館林藩主松平斉厚が十五代藩主に就任、最後の十八代藩主は徳川慶喜の実弟、松平武聡でした。1866年第二次長州征伐のとき、石州口の戦いで大村益次郎率いる長州軍に破れ、病弱の武聡は浜田城に火をつけ、松原湾から船で脱出、江津沖で松江藩に助けられました。

今回の歴史旅行では、広く海外に向けて開かれた七十余万石の外様の雄藩、薩摩の力をまざまざと実感することができ、1867年のパリ万博には幕府の向こうを張って「薩摩藩」として参加し得たことが納得できました。当時、「薩摩は日本の一部である」と誰かが言ったのでしょうか？

最後になりましたが、今回も幹事としてお世話いただきました山田哲司様、小野博正様をはじめ、見学先の手配や資料の準備などをして下さいましたメンバーの皆様に厚く御礼申し上げます。

(参考資料)

浜田町史：昭和10年刊行  
浜田市史：昭和48年刊行  
古川薫著：「閉じられた海図」  
1988年文芸春秋発行 ほか。

一言ご挨拶申し上げます。

先日の薩摩の旅、初めて参加させて頂きましたが、とても充実した旅の経験となりました。個人的旅行では経験できない内容ばかりで新鮮でした。今まではあまり歴史に目を向ける機会がありませんでしたが、今回皆様と同行させていただき、改めて人間の歩みや時代の流れなど歴史の持つ奥深さを五感を通し感じる事ができたように思います。この時代に生きる私たちのあるべき姿なども改めて考えさせられました。このような機会を与えてくださった方々に、改めて心より感謝いたします。 西田昌美 (名古屋)

五月旗 仕舞て寂みし 島津雨

ブラシの木 赤く迎える 磯御殿

有馬増子



## 薩摩歴史の旅

納家 弘美

6月18日季節外れの大型台風の接近を報じている中で薩摩の旅に参加して今年も明治期の歴史として教えられていた事と違う現地の話を聞き目から鱗が噴火していきましました。

特に西南戦争は始めに政権側が武器弾薬庫を襲ったのが始まりでその時、西郷隆盛は別の場所にて応援に駆けつけて戦争になったとの説明に驚き大久保利通が悪者にされてその後暗殺されたが彼の毅然とした態度と借金が残っていたと言う清潔な身辺を知り二人の幼少期からの関係と大久保の性格を知り尽くしていた人が大久保を悪者に仕立てあげて、不満分子をコントロールし役得をした人物が居たのではと感じました。

それにつけても大久保利通の国を思い我が身を捨てた立派な態度に本当の武士道精神を受け継いだ大物政治家であったと感じいました。

薩摩の大物政治家の大久保利通と西郷隆盛の二人を失った日本の損失は測り知れない大きな物があり、その後の日本の歴史を変えるものであっただろうと残念に思いました。

「勝って官軍」と言う言葉が残ったのは史実を都合よく報道したであろう事が伺えて長い間の疑問を少し納得出来ました。

もう一つ納得したものに農耕地の少ない島津藩が時の政権と上手く手を繋いで貿易に因る経済的な繁栄と独特の教育制度を設け、先輩後輩の立て社会により優れた師弟が育ち下級武士の西郷隆盛 他が大活躍の出来た事は大きな下地があったと解りました。

幕末の混乱を乗り切る原動力が大きく機能した事により日本の植民地化が阻止された源になったであろう事に感銘を受けました。昨年は山口県の歴史の旅で明倫館の教育制度を知り幕末の混乱を避ける知恵と説得力を持った人物が育っていた事と日本の勤勉な国民性まで引きあげ新しい物に挑戦して向上心を持った多くの人々が育つ根幹をなして今日の繁栄を、もたらしたのだろうと思いました。

アラブ系の人達は伝統を守り何処へ行くのにも習慣を変えないで服装は、もとより入浴習慣の違いで悪臭を撒き散らしながら行動をしているのに日本人の岩倉具視大使一行は初めての視察中でも西洋の習慣の良いものは、どんどん取り入れている態度に視察を受け入れた国の人々が称賛している事を知り日本の発展の源が土農工商による礼儀正しさと教育に有ったのだらうと感じいました。

横社会で通算25年間暮らし3人の子供を産み育て自己主張の強い中で学んで日本の立て社会に適合しきれない思考をする人間に育った子供達の現実に幼少時の教育と思考の大切さを実感しております。

1965年に初めて外国に駐在員家族として生活し一番驚いた事は文盲の人が多くクリスチャンと言って神を崇めながら嘘つきと泥棒は日常茶飯事で全ての罪を神に謝り許しを乞い後は平然としている事は信じられない事でした。

又外国物は何でも優れている風潮の中で経済力の弱い日本を後にして新聞雑誌報道関係の恩恵に恵まれない当初は現地語で補う生活を余儀なくし、子供達の言葉を2カ国語の通じる教育問題に頭を悩ませた数年の苦労は実際に外国で子育てをした人にしか理解して頂けないと思います。

年々日本製品が優れている物が多くなり外国人からも日本の良さを指摘される時代になり鎖国から130余年で食べ物に困らない生活を送れる人々が殆どで平和な日本を築き上げた先人の知恵と努力に感謝しております。

その間に日本より先進国であった国々に日本の援助物資や技術協力をする仕事等も加わり忙しい駐在員家族の生活を送った事実があります。

太平洋戦争で唯一日本が世界から非難されている現状は歴史を学んで行くにつれて実際と違う事を教えられているのは何処の誰の意図に因る物かと勘ぐりを増してきました。タイを除く東南アジア諸国を植民地から独立国になるきっかけを作ったことが歴史として評価されていないのを残念に思います。

特に韓国は日清戦争までは中国の属国であった「韓国は日本人がつくった」(黄文雄 WAC BUNKO)等とは教えられて無く日韓併合により日本は膨大な投資をして治山治水を行い韓国の発展の基礎固めを行ったのに対して汚点だけが強調されている現状を指摘し歴史資料を元に書いた本を読み驚きました。

1980年から1993年まで過ごしたチリ国でアゼンデ政権を軍事力で倒したと言われるピノチェット大統領に対して日本の報道関係の事実誤認による報道には驚きと怒りを感じます。国内の物資不足で毎日の生活必需品を買うために長蛇の列に並ばなければ商品が手に入らない生活苦を見かねて荒廃した国を立ち直らせる為に4軍(陸、海、空機動)が1977年に立ち上がってアゼンデを国外追放するべく用意し革命を起こしたと聞きました。

1980年9月に国民投票を行い1988年まで4軍の共同体軍事政権を続け又八年後に国民投票を行い民事政権に移行するかどうかを問うもので全ての外国人も参加が許されて行われ我々も投票しております。その結果70%を超える支持を得て大統領になり又1988年に再度行った国民投票は5年以上の滞在外国人にも投票権があり私も写真付身分証明書を持って選挙管理委員に登録をして、その立派な選挙を実行した一人として声を大にします。

この時の外国からの激しい選挙運動援助を目のあたりにして親しくしていたチリの人々の選挙についての活発な自己主張を聞き又私の支持者は誰かなど自由な意見交換を求められ1000ペソ券を差し出されて断ったのが後で、それは寄付をして支持している人に選挙戦を勝ち取ってもらうチリの選挙制度と解り、とても恥ずかしく思いました。未だ日本では国民投票と言う言葉や制度も理解している方が少なく選挙では袖の下のお金が罷り通っていた時代でした。後日送られてきたビデオテープを見ていたらチリの選挙について軍事力で操作をしたであろうなどとコメンテータの談話で報道されており訂正をしたのを聞いたことはありません。

軍事政権は即、独裁とインプットされて誤解している方が多いのでは無いでしょう

か。国によって様々な形態があり、日本の常識で現地調査もしないで憶測で報道してしまう恐ろしさを実体験しております。世界中から寄って集って違反や権力の振り回しをチェックしてヤラセをしてまで偽情報を流したにも拘らず見つけ出す事が出来なかったのです。袖の下の罷り通らない中南米では珍しい国に育て上げ経財も復活させる原動力を作り日本がバブル経済で落ち込んでいる時にGNPは追いつかれていた事を知っている方はどれだけおられる事でしょうか。ピノチェット大統領の再評価される日を待つ一人です。

4軍のご婦人方とボランティア活動を通じて教えられた事で交通費も自前であると又、ボランティアとはどのようなものであるかなど多くの事を学びました。選挙の結果は52%対48%(4捨5入)で敗れて世界に報道された時、大差で負けたとの偽報道に呆れて何処の誰の力でそのようなニュースを流したのかと不信を募らせた経験があります。

大久保利通も再評価されて来たようですから、歴史とは時の政権や権力者により都合よく書かれる物なのかと斜めに構えて読むようになりました。

徳川幕府の取った鎖国制度が宗教の名を借りた植民地侵略を阻止して国内の秩序を固め265年間に戦いの無い平和な社会が営まれており民衆を治め育てていた歴史を振り返る時近隣諸国の、植民地化されて悲惨な社会であった史実を知るにつけ、上に立つ人達が民を思い自己優先をしない配慮と政治力が、その国を向上させるのだと歴史の旅と勉強会を通じて知りました。有意義な旅をお世話下さった皆様に有難うとお礼を申し上げます



## 薩摩の旅～西郷どんに思いを寄せて～

松本伸子

子ども時代から幾度となく訪れた鹿児島は、いつも南国の暑い太陽に照らされていました。しかし、今回は、“島津雨”で歓迎され、しっとりした鹿児島の旅を体験でき、小雨に煙る桜島も趣き深いものでした。



波の音を聞きながら・・・  
テントの中でこのような姿を想像して・・・

鹿児島といえば、温泉、温泉・・・。

指宿の砂むし温泉を期待しましたが、今回は雨で残念。テントのなかでの砂むし体験。残念な思いを絵にしました（本来はこのようであったらと想像して・・・）。きびなごも薩摩豚もおいしかった。

鹿児島で最初に訪れた「沈壽官」窯元では、りっぱな作品を見ることができたとともに沈壽官先生のお話を直接伺うことができ、感激しました。

沈壽官先生と  
名古屋の仲間  
たち



「沈壽官窯」をはじめとして、西郷どん、明治～太平洋戦争と時代を巡った薩摩の旅は、私の頭脳を刺激し、さらに夕食後の学習はとても興味深いものでした。歴史を振り返り、“今”を考える（例えば教育などについて・・・）。とても大事なことと思います。今回の「薩摩の旅」もまた私の思い出の1ページに加わりました。

小野博正

今度の旅の沈寿官窯で求めた黒薩摩の猪口で薩摩焼酎を飲みながら、この紀行文を書いている。その薩摩焼酎が、さつまいものアルコールを使った雷<sup>らいこう</sup>銃という雷管銃の信管に使われていたとはこの旅で知った。薩摩藩は、高い米に代わる焼酎の材料として芋焼酎を開発しつつ、工業化にも利用していたのだ。

去年の長州の旅では、行くところ至るところで幕末・明治維新の志士たちの群魂(むらきも)が立ちのぼっていた。それは、高杉晋作であり、吉田松陰であり、木戸孝允であり、伊藤博文であった。そして、その政治人脈はいまに脈々と続いているような気がする。

幕末維新の、もうひとつの雄藩である薩摩は、今は、のんびりとした南国の風光明媚な田舎であった。白い風車がまわる丘があり、ところどころで崩れた火山灰のシラス台地の山々と、海に向かって開けた野菜畑に、遅霜防止の扇風機が林立した、整然とした茶畑が延々と連なる、日本一の茶の産地・知覧を擁する農業国に転じている。ここが、幕末明治の日本の産業や国家の近代化の、重要な揺籃の地であったとは、歴史を学び、史跡を見るまで信じられない程に、歴史の跡を払拭した静けさがあり、庶民の生活が息づいていた。

人気の英雄・西郷隆盛のゆかりの地は、薩摩の地の至る所に散在し、顕彰されているが、印象的には仰々しくなく、奥ゆかしくひっそりとしている。私の敬愛する、大久保利通にいたっては、そのすばらしい業績からみて、実に慎み深くささやかな顕彰である。盟友の西郷隆盛を西南戦争で、死に至らしめたことと、廃藩置県の断行で国父・久光の逆鱗に触れたこともあるが、すべては日本国の近代化のためという視点で、思い切って郷土を切り捨てたとも言える政治姿勢を貫いたことが、鹿児島で不人気の原因であろうか。

反対に、薩摩では島津藩主一族の歴史が随所に立ちはだかったのが印象的であった。

西郷・大久保に劣らず、維新を実現させた原動力は、斉彬と久光の存在を抜きにして語れないことを実感した旅でもあった。

5月18日鹿児島空港で、東京組17名、名古屋組3名、大阪組1名の21名が落ち合って、薩摩歴史の旅は始まった。空港から鹿児島交通観光のバスで、一時間ばかり走り、伊集院を抜けて、美山の沈寿官工房を最初に訪れる。会員浅生さんの友人のご手配で、現15代の父親である、14代沈寿官に迎えらる。秀吉が朝鮮に遠征した文禄・慶長の役に参戦した、島津義弘が80名の陶工を連行して、美山に住みつかせたのが沈氏で、藩の庇護の元に白薩摩と黒薩摩を創窯した。白薩摩は島津家ご用達、黒薩摩は庶民に愛された。明治に12代沈寿官は、藩宮焼物所を主催して、オーストリア万博に大花瓶一對を出品し、外国人の賞賛を博し、以来、豪州、ロシア、アメリカなどの万博に出品し、輸出の道を拓き、サツマウエアーは日本陶器の代名詞になった。今回、工房の陶工たちの繊細な作業を窓ガラス越しに見学した後に、司馬遼太郎の“故郷忘じがたく候”の主人公で、大韓民国の名誉総領事もある14代の案内で、美術館の至芸の品々を堪能する。黒千代香(ジョカ)、ソラキュウの雑器も人気がある。まだ、去りがたい思いを残しながら沈寿官を後にした。

香木の花さみどりに白薩摩



伊集院の麵処“さつま”で昼食をとり、鹿児島市内に向かう。大久保利通の銅像、維新群臣の像、西郷隆盛の銅像などを車窓に見て、維新ふるさと館を見学する。“薩摩の歴史が一目でわかる”と銘うった体感ホールを備えた、比較的新しい施設である。

映像と維新の偉人ロボットに語らせた薩摩の維新史。薩摩琵琶で語る西南の役、西郷・大久保の人となり。薩摩武士を育んだ“郷中”教育の体感。世界に開かれた日本の南玄関とも言える薩摩は、国内交易や琉球を通じた中国貿易など、他藩に先駆けた西洋の新しい技術や文化を導入したこと。西洋式帆船・昇平丸を初めて造り、昌平丸として幕府に献上し、その際、日の丸を国旗として採用することを提唱したのが薩摩。君が代もまた薩摩がルーツであり、フェントンに作曲させたと解説されている。

西郷隆盛の生誕の地は小さな公園であった。そこに郷中教育のイラストがあった。



	小・稚児	長・稚児	二才
6時	二才の家へ行き 四書・五經などの講義をうける		稚児への講義
8時	馬場や神社の境内で、すもうなどで体をきたえる(雨天時は大名カルタなどあそぶ)		
10時	朝の講義の復習、 長稚児が小稚児を指導		役職についている者 陣行(幕の役所)で仕事 役職がない者 番工館(幕の手廻り)で勉強
正午			
2時	山あそび、川あそび むげっこなどしてあそぶ		
4時	武芸のけいこ		
6時	午後6時以降は、 外出禁止		
8時	ときには、二才衆から 日ごろの生活態度などの 指導をつける		夜話(控議(武士としての 心得)について討議)、 読書など
	午後8時には帰宅		

ほうぎり方限という薩摩独特の武士集団を郷中といい、二才組の二才頭を中心に、稚子と呼ばれる18歳以下の若者の自主的な心身鍛錬の青年教育に当たる。西郷は19歳で、下加治屋町の二才頭となり、後輩の指導に当たった。この下加治屋町の郷中から、西郷兄弟、大久保利通、吉井友実、伊地知正治、篠原国幹、村田新八、大山巖、東郷平

八郎、山本権兵衛などを輩出している。これは西郷の感化が大きかったためと言われている。郷中の基本書は“いろは歌”で、[いにしへの道を聞きても唱へても わが行いにせずばかひなし]というような実質的な教育を行った。山坂達者と足腰を鍛え、文武両道に励み、忠孝の実践が薩摩の郷中教育の目標であった。

初日は、このあと城山の展望台に上り、桜島と鹿児島市内を望み、南洲墓地に西郷を取り囲んだ西南戦争で亡くなった士族の墓を詣でて、南洲神社と西郷南洲顕彰館、城山の西郷が隠れた洞窟、城山下の西郷終焉の地をまわって、鹿児島市内の中心地・天文館にあるザビエル・450ホテルに投宿した。夕食は、風邪の為に遅れて駆けつけた泉代表を加えた22名と尚古集成館の館長の村田省三さんを交えて、ホテル近くの天文館にある熊襲亭にてとる。参加者全員が自己紹介をしながら、薩摩料理を堪能した。





夕食後、ホテルに戻り会議室で、村田省三館長の『薩摩藩と日本の近代化』一海の視点からと題して、お話をして頂いた。

〔鹿児島は南北に600kmの長大な県であり、且つ、江戸時代は実質的に琉球王国を支配していたので、その影響力は南北1、200kmの広範な海域にも及んだ。江戸幕府は鎖国をしていたが、琉球王国が中国と朝貢し、薩摩藩と二重支配になっていた関係で、薩摩藩は琉球経由で間接的に中国や、タイ、ベトナム、フィリピン、ジャワなど東南アジア諸国、更には西洋の物産に接し、他国の文明情報がいち早くもたらされる位置にあった。鉄砲が種子島に伝来し、キリスト教が最初に伝来したのも鹿児島である。欧米列強がアジア諸国を植民地化している実態や、中国が英国に翻弄されてアヘン戦争に突入するに至った情報などもいち早く入り、薩摩藩の国防に対する危機感を煽った。幕末には、モリソン号事件、宝島事件のイギリス人との銃撃戦、支配下の琉球への、フランス、イギリス、ペリー艦隊の来航と通商要求などの外圧を他藩に増して、まともに受ける立場にあった。一方、歴代の島津藩主は英明であった。特に蘭癖大名とも異名をとった島津重豪は長崎を訪問して、オランダ商館と接触し、同じ蘭癖の曾孫・斉彬を伴ってシーボルトに面会したりしている。その、斉彬が藩主となるや、日本を西洋列強のような強く豊かな国にしなれば、日本も列強の植民地にされてしまうとの危機感から、富国強兵・殖産興業政策を推進するために、集成館事業を起し、造船、造砲、製鉄、紡績、ガラス、印刷、民需産業の育成、電信、医療、福祉など様々な分野を開発した。その財源のひとつには、鹿児島の加世田辺りにて、昔から密貿易にかかわった倭寇や海賊、貿易商人たちの力でもあった。その有力な

海賊のひとりには鮫島氏で、その後裔が今の小泉純一郎首相であるという話は、面白かった。これで明日からの見学がいっそう楽しみとなった。

台風一号の九州接近しており、怪しげな風雲のなかで2日目が始まった。

まず、鶴丸城跡にある黎明館・鹿児島県歴史資料センターを訪れる。ここは鹿児島の原始、古代、中世、近世、現在の歴史が概観できる見ごたえのある展示館である。鹿児島は3万年前の石器時代からの足跡があり、縄文の遺跡や、鹿児島の島々の民具やお祭りの衣装には東南アジアの影響が強い。中世は島津家の領国形成の過程と大陸との交易など、外来文化の窓口としての色彩が強い。島津家の祖・忠久（1179-1227）は源頼朝の子とも伝えられ、頼朝が守護に任命した大名家で江戸時代まで存続できたのは島津家だけであった。その長い伝統が強力な家臣団を作り、自らの歴史を誇りとして来た。鹿児島藩となってからも、幕府の一国一城の原則に反し、本城である鶴丸城以外にも領内の各地に防衛拠点として外城とじょうを設け、多いときには113の外城があった。その多くは山城であったが、平時は“麓”と称する、今も風情を残しながら各地に散在する武家屋敷に住ませた。

黎明館を出るところから降り出した雨は、自称晴れ男の西井さんの神通力にも拘らず、仙巖園の磯庭園を散策するところには本降りとなり、学芸員が“皆さん、島津の殿様が生まれたとき雨が降ったといわれ、島津雨とは、鹿児島ではお目出度い雨とされています”との説明を受けるまもなく、横殴りの風と共に槍のような激しい“島津雨”の洗礼を受けた。



## 桜島霞め 篠つく島津雨

仙巖園の庭園の散策は一旦切上げて、同じ庭内で昼食を先にとり、食後に小雨となった庭内を回遊した。反射炉跡、錫門、望嶽楼、千尋巖、曲水の庭、江南竹林と磯御殿は島津家の別邸であった。目の前に見えるはずの桜島は、朧に霞んでいた。

隣接する、近代日本の発祥の地・地元では島津ヘリテージとも言われている尚古集成館に入る。1851年に薩摩藩主となった、島津斉彬は、日本をヨーロッパの国々のような強く豊かな国にすることを夢見て、非常にスケールの大きな近代化事業としての集成館事業を推進した。特に、幕府や他藩が軍事力強化を主体としたのに対し、ここは紡績、機械、印刷、出版、教育、製菓、精糖、ガラス、ガス、医療、写真、窯業等の産業育成や社会整備の基盤まで及んでいたのは、斉彬の“人々が豊かに暮らせるようになれば自然と纏まる。人の和はどんな軍備よりも勝る”との考えに基づいている。斉彬は、幕府や藩といった枠を超え、日本人が一丸となって近代国家を築くべきだと主張していたのである。幕末に心半ばで、病に倒れたこの斉彬の意思は、弟の久光公や娘婿の忠義、西郷隆盛、大久保利通ら多くの家臣に引き継がれて、明治維新が実現した。更には維新後、大久保利通によって富国強兵・殖産興業が唱えられ、各地に官営工場が生まれて産業の育成に努めたのは、斉彬の夢の実現とも考えられる。要するに、江戸期のこの種の遺産が、明治期の急速な近代化を助けたことは間違いなからう。

このあと、薩摩切子工場にて、切子の出来あがる工程を見学の上、異人館に回る。異人館は紡績工場に招聘されたお雇い外国人が住んだものであった。斉彬は、1855年に紡績所を建て、綿花の栽培や手織木綿を作らせ綿花の自給を図り、忠義は紡績工場建設のため、新納久修、五代友厚を14名の留学生と共に英国に派遣、紡績機械の購入に当たらせ、帰国後、相次いで、7名の英国人工場長・技師を招いている。

こうして、鹿児島市内での歴史ツアーを

終えて、一路南薩摩の指宿に向かって、錦江湾に沿ってバスで南下する。途中、到着の日に空港で、さつま揚げの差し入れをくれた薩摩城という店で休憩し、日本最大の石油備蓄基地・喜入を通り、マングローブ北限の地を見ながら、指宿港に立つ濱崎太平次の銅像の写真を撮りに立ち寄る。別稿・西井易徳氏『濱崎太平次』に添える写真を撮るためである。濱崎太平次については西井氏の論文に詳しいが、薩摩藩の近代化事業と明治維新を実現させた資金源は、濱崎太平次ら薩摩の豪商がバックにあったのである。

しかし、薩摩にも光と陰があった。島津藩は支配下の領民、奄美、琉球に対する搾取は過酷であったようだ。八公二民の酷税で、特に奄美大島では吸血虫とも言われ、砂糖の専売で島民を搾りに搾った。薩摩の農民は、生活の苦しさを救うために禁制であった一向宗に逃げ、隠れ念仏として400年も生きのびた。こうして、武士の比率が5割近かった薩摩藩を支え、その薩摩藩が維新の起爆剤になったことを想うと歴史の玄妙さと過酷さに打たれずにはいられない。

指宿では、指宿いわさきホテルに投宿した。砂風呂に入る間もなく夕食となり、再び夕食後は、明日の訪問先の坊津歴史資料センター輝津館の学芸員・橋口亘氏を講師に招き、坊津・山川港を中心とした薩摩海の道の歴史を教わった。

3日目、最後の日は山川港から始まる。今は小さな漁港に過ぎないこの港は、“唐物くずれ”の17世紀以降、それまでの坊津港に変わって、薩摩藩の中心の港として浮上してくる。ルソン、カンボジアに向けて島津家が最初に朱印状を出した船が、この港から出ている。1609年（慶長14年）に島津家久は樺山久高を派遣軍総大将として、軍船100余艘、3000余人の兵力で琉球出兵を行ったのが山川港である。江戸時代には、琉球・奄美大島との濱崎太平次の活躍の舞台でもあった。

続いて、開聞岳を右左に見ながら、バスガイドさんの説明で、宮崎と並んで南薩摩は神話の神々ゆかりの地が多いと聞きつつ、九州一大きな湖で、大ナマズが棲むという

池田湖をめぐり、頼娃を抜け、枕崎を過ぎるとやがて坊津港である。古代から、日本三津のひとつで、伊勢安濃津（今の津市）と筑前博多津と並び称された。近くの秋目浦は、天平の昔、鑑真が乗った船が、到着した港であり、遣唐使が最後に寄った日本の港、更には倭寇、海賊、唐人貿易として栄えた。1716-36年幕府の、唐物崩れによる取締り強化で、表向きは山川港に席を譲ったが、その後も密貿易の拠点であった。坊津歴史資料センターは鄙にもまれな堂々とした建物で展示品も大変に充実していた。折しも、坊津名勝の双剣石の隣の、鵜の島が国史跡指定に答申されたと、喜びに沸く坊津であった。ここで、再び、昨夜の橋口氏の説明を受ける。朱印状の渡航許可証が目を引いた。

坊津を後にして、見渡す限り茶畑の知覧に入る。今回の最終目的地である。武家屋敷と武家屋敷の庭園を見学して、豪華な昼食をとった後、知覧特攻平和会館を訪れる。先の大戦で散華した1036柱の出撃して行った、幾つかの基地のひとつである。それぞれの御霊の遺品や遺言や写真とゼロ戦の残骸などに満ちている。あまりにも悲しい歴史であり、見たくもあるが、私は駆け足でめぐった。昨年、やはり硫黄島で玉砕した父の60年忌を記念して、『父の戦地便り』を編纂した私には、丁寧に見るにはあまりにも痛ましい品々であったからだ。いくら平和ぼけと言われても、やはり平和は尊い。しかし、今も昔も人類は、誰もが嫌いなはずの戦争から逃れられない悲しい運命にあるのはなんとも情けない。了

特攻の町 武家屋敷 新茶かな  
初夏の 海みんなみへ 限りなし  
万緑や 散華の兵ら 発ちし跡  
黒南風くろはえに ばくちの木とや 仁王立ち

#### 惜別譜—西郷隆盛

明治10年9月23日西郷は  
城山に籠っていた。  
その日、終日雨だったが  
夜になって雨雲があがり、  
立待ちの月があらわれた。

明朝の官軍の総攻撃は、  
すでに西郷に伝えられていた。  
攻める官軍総大将は  
西郷を敬愛してやまない山県有朋  
司令は、東京にいる弟・西郷従道  
そして、無二の友、大久保利通  
天皇も国民も、誰もが  
この維新の英雄を愛していた。

西郷は維新政府の安定のために  
士族の悲しみに殉じようとしていた。

その夜、西郷のために  
官軍より花火が打ち上げられ、  
やがて、官軍軍楽隊・中村祐庸率いる  
薩摩バンドにより、  
レクイエムが奏された。  
それは、ヘンデル『栄誉の曲』  
一見よ 勇者は帰る。だっか、  
ショパンの清新な、そして甘美な  
鎮魂曲だったか。  
はたまた、その双方だったか。  
城山の西郷に届ける惜別の譜は  
深々と、城に響き渡った。

遠く、  
西郷はそれをどう聴いたのか。  
誰も知らない。  
かくして、  
その翌日、西郷は散っていった。

[小野博正]

《特別寄稿》

## 知覧特攻平和会館を訪ねて

平成 15 年 2 月 1 日 永富 邦雄

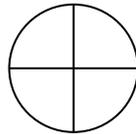
昭和 20 年 3 月米空母 27 隻を中心とした大艦隊が沖縄沖に集結、戦況は俄かに緊迫し敗戦の兆し濃厚になった折り、陸軍大本営は九州南端の知覧陸軍航空隊基地を主軸とする万世・都城基地及び台湾各基地等を「特別航空隊基地」に指定し、通称「沖縄特攻隊」が編成された。私は 1 月末に当地を訪ねこの特攻で散華された 1036 柱の英霊に対しひたすら鎮魂の祈りを奉げてきた。すばらしい遺書や辞世の句が沢山展示されているが涙無くしては読めないものばかりである。其の英霊達の平均年齢はおそらく 20 歳前後と推測されるが、出撃前夜彼等が「お母さん」と慕っていた鳥濱トメさんが経営する「富屋食堂」に「最後の晩餐」に出向き別れを告げるが、トメさんは彼らを励まし見送り、兵士達の心を癒してくれた。正に真の救い主と言えよう。さて当時の国情から推して「死」も含め何らかの形で国の為に尽くすことは当然のことであったと思う。歴史を顧みると、現在の価値観で判断することは誤解を招く恐れあり、特に国の為に犠牲になられた方々を冒瀆することになり兼ねない。終戦直後に「戦艦大和の最後」を書かれた吉田満氏が（海軍予備学生出身の少尉）「敵愾心とか、軍人魂とか日本人の矜持とかを強調する表現が、戦争肯定の文学であり軍国精神鼓舞の小説也とかなり批判されたが、自分は当時の体験をありのままに偽りなく描こうとしたので自分がこの程度の血気に燃えていたからといって、別に不思議はない。若者が最後の人生に生き甲斐を見出そうと苦しみ、そこに何ものかを肯定しようとあがくことこそ、むしろ自然ではなかろうか。このような昂ぶりをも戦争肯定と非難する人は、それでは我々はどう振る舞うべきだったか、招集を忌避して死刑になれというのか、教えていただきたい。」といわれた。正に宣なるかなである。又「戦艦大和」で戦死された臼淵大尉が「進歩の無い者は決して勝たない 負けてめざめることが最上の道だ 日本はこれを軽んじ過ぎ 私的な潔癖や徳義にこだわり本当の進歩を忘れた 敗れて目覚める それ以外に日本を救う道無し 俺達はその先導になるのだ 日本は新生に先駆けて散る 正に本望じゃないか！」この言葉こそ特攻精神を凝縮した表現である。今日の繁栄は彼らの犠牲の元にあることを我々日本人は忘れてはならない。

「散るために 咲いてくれたか さくら花 ちるほどももの みごとなりけり」

特攻の母 鳥濱 トメ

合掌





国内歴史ツアー 薩摩旅行 参加者一覧（順不同・敬称略）

泉 三郎、西脇美都絵、星 守彦、浅生庸子、永島脩一郎、大森東亜、金本君子、  
若盛宗雄、梶 春治、三岡弥生、山田哲司、橋本信子、田中直美、西井正臣、  
新倉宏子、石川直義、三原 浩、西田昌美、納家弘美、有馬増子、松本伸子、小野博正

編集：米欧亜回覧の会

編集責任：小野博正

出版日：平成18年（2006）7月10日